

# 311

● 東日本大震災

## 宮城県建設業協会の闘い5

復興を担う次世代のために



# 3.11

● 東日本大震災

## 宮城県建設業協会の闘い5

復興を担う次世代のために



東 日本大震災を機に、

地域との距離が縮まった。

防 災林の植樹、

親子現場見学会、

夏休みの宿題・自由研究のイベント…

公募すると、一般から多くの参加者が。

輝 くような子どもたちの笑顔、

そっと寄り添い見守る家族。

もっと、ものづくりの楽しさを、

もっと、安全・安心な暮らしを守る大切さを…。

震 災でさまざまなことを経験し、

広報や情報発信の重要性も学んだ。

震 災の経験を継承するとともに、

地域建設業をわかってもらうには、

活動の幅を広げなくてはならない。

復 興を担う次世代のために、

できることはまだまだある。

次 に地域を守っていくのは、

これからの世代なのだから…。



岩沼市で行われた防災林の植樹では、一般参加者と協会会員会社の社員が協力して1,000本の苗木を植えた(2016年10月22日)。

東日本大震災より間もなく6年、宮城県震災復興計画10年の折り返しを過ぎ、官民の総力を挙げた取り組みにより一歩ずつではありますが、着実に復興への歩みを進めており、「まちびらき」が各所で開催される等、復興の姿が見え始めているところであります。

からの早期「創造的復興」に総力を結集し取り組むとともに、災害基本法に基づく宮城県の指定地方公共機関の位置づけのもと、今後も地域の安全・安心で快適な暮らしを支える「町医者」として、住民のニーズに応えるべく、将来の担い手を確保・育成できる環境整備に向けて、建設

## 将来の担い手を確保・育成できる 環境整備に向けて、 建設現場での生産性向上や 女性活用の推進を図る

発刊のごあいさつ

一般社団法人 宮城県建設業協会  
会長 千葉 嘉春



一方で、地震や火山の活動期に入るとともに季候があらたなステージに移行し、2016年も「熊本地震」「台風10号」による岩手県岩泉町の水害「鳥取県中部地震」や「鳥インフルエンザ感染」、宮城県内でも11月に津波警報が発令される等、自然災害が各地で甚大な被害をもたらす、地域並びに住民の安全・安心の確保に向け、インフラの更新時期が迫っている老朽化対策とともに、国土強靱化に向けた計画的・継続的な取り組みが望まれているところであります。

また、少子高齢化時代を迎え、産業間による人材確保に向けた競争の激化が見込まれ、高齢化の進展が顕著な建設産業界における将来の担い手確保・育成に向け、新たな建設産業の3K（給料・休日・希望）を掲げ、現在、官民挙げて建設産業で働く従事者の環境改善、処遇改善、働き方改革等の各種施策に加え、生産性向上へのIoT活用によるi-Constructionの取り組みも加速的に進んでおります。

当協会と致しましても、東日本大震災

現場での生産性向上や女性活用の推進を図るべく、女性の会の設置による展開、働き方改革等を進めて参る所存であります。

そのような状況において、震災から6年の復興の現状を地域建設業における担い手の確保・育成への取り組みや視点等を入れ、このたび震災記録誌第5弾を発刊致しました。

この大震災を風化させることなく、発信していくことが当協会の役割であることを強く認識し、「町医者」として必要な危機管理産業であることを広報し続けるため、真の宮城県の復興の姿が見えるまで記録誌を発刊して参りたいと考えております。

最後になりますが、大震災直後より、これまで全国建設業協会をはじめ、各都道府県建設業協会並びに関係団体等の皆様方にはご支援・お励ましを賜り、衷心より御礼を申し上げますとともに、記録誌の作成にあたりご協力を頂きました関係各位に対しまして厚く感謝を申し上げます、ごあいさつといたします。

## 発刊に寄せて

宮城県知事 村井 嘉浩



宮城県建設業協会並びに会員の皆様には、東日本大震災発災直後の道路啓開や安全避難など応急復旧活動から、現在、ピークを迎えている復旧・復興工事まで、県や被災市町へ多くの御支援、御協力を賜っておりますことに厚く御礼申し上げます。

東日本大震災からまもなく6年が経過します。今年は、『宮城県震災復興計画』の10年間における「復旧期」3年間に続く「再生期」4年間の最終年を迎え、ふるさと宮城の再生と「創造的な復興」に向けて大変重要な年となります。

昨年は、4月に東北医科薬科大学への医学部新設、7月には東北の空のゲートウェイである仙台空港が、国が管理する空港として全国初の民営化を果たすなど、「創造的な復興」に向けて蒔いた種が次々と開花はじまりました。さらに、今春には三陸自動車道の南三陸海岸ICまでの延伸や石巻女川ICから桃生豊里ICまでの四車線化などにより、地域の雇用拡大や人口流失の抑止への波及効果が期待されます。引き続き、復旧にとどまらない抜本的な再構築を行い、様々な分野

で新しいことに積極的にチャレンジして、復興計画における「発展期」のステージへとつなげてまいります。

また、昨年は、4月の熊本地震、8月には東北地方を直撃して岩手県や本県に深刻な被害をもたらした台風10号など、自然災害の脅威をあらためて痛感させられるとともに、将来の大規模災害に備えて、東日本大震災の教訓を継承・発信していく私たちの役割の重要性について、強く再認識したところでございます。

今回が第5弾となる本震災記録誌は、貴協会と行政との連携のもと、着実に進捗する本県の復旧・復興の現況を全国の皆様にお知らせするだけでなく、震災に向き合って悩み、困難を乗り越えた被災市町や地域の建設企業の姿を映し、大震災の教訓を継承・発信する教材となるものであり、大いに活用されることを期待しております。

結びに、貴協会のますますの御発展を祈念いたしまして、発刊に寄せてのあいさつといたします。

# 一般社団法人 宮城県建設業協会

昭和23(1948)年1月に宮城県土建協会として創立され、昭和25(1950)年7月に社団法人宮城県建設業協会に改組。宮城県に本社を有する約250社の地域建設業で構成される。協会本部を仙台市青葉区に置き、沿岸部に面する5支部、内陸部の4支部の計9支部で組織される。平成25(2013)年4月から一般社団法人に。

## 活動内容

国や宮城県等との「大規模災害時における応急対策業務」、口蹄疫や鳥インフルエンザへの対応としての「家畜伝染病の発生時における緊急対策業務」に関する協定等を締結し、有事の際の危機管理産業として、地域及び住民の安全・安心で快適な暮らしを支える活動を展開している。

平成15(2003)年「宮城県北部連続地震」、平成20(2008)年「岩手宮城内陸地震」、平成23(2011)年「東日本大震災」、平成26(2014)年「豪雪」をはじめ、災害時にはそれら協定にもとづき、各機関の要請を受け、あるいは自主的にいち早く現場に駆けつけ、早期

応急復旧に向けた対応等について組織を挙げた活動を展開している。

そうした献身的な取り組みが評価され、平成26(2014)年3月には、宮城県から災害対策基本法に基づく「指定地方公共機関」の指定を受けた。協会が策定する防災計画に基づき、定期的な実地訓練等とともに体制整備の強化を図り、これまで以上に地域建設業として、協会組織として、地域及び住民の安全・安心で快適な暮らしの実現に寄与するとともに、東日本大震災からの1日も早い「創造的復興」が遂げられるよう総力を挙げて取り組んでいる。



## 東日本大震災対応

直ちに協会本部に災害対策本部を設置。県内9支部のうち、津波被害を受けた沿岸3支部には連絡が付かなかつたが、会員企業は自ら被災しながらも被災現場に駆けつけ、道路啓開を開始していた。「俺たちが地域を守る」という使命感から、協会の総力を挙げて、遺体捜索や燃料・食料・衣服の提供、さらには遺体の仮埋葬、腐敗した水産加工物の処理まで、あらゆる要請に応えた。

緊急対応が終わると、崩壊したインフラや建物

の復旧・復興事業が待ち受けていたが、事業量が膨大だったため、施工までの調整・計画が整わず手待ちが長期化。人員も資材も大変窮屈な中、現場技術者は厳しい条件の下で懸命に闘い続け、協会本部も課題に直面する度に関係機関に要望活動を行うなどの後方支援を重ねてきた。1日も早い復興を望む地域の声に応えようと、現在も闘い続けている。

## 目次

ごあいさつ 宮城県建設業協会会長 千葉 嘉春	4	2 「将来の担い手」確保～高校生、大学生、海外研修生	69
発刊によせて 宮城県知事 村井 嘉浩	5	インタビュー 遊佐 忠行 宮城県古川工業高校建築科長	70
宮城県建設業協会の概要と活動	6	古川工業高校から地域建設会社へ	72
東日本大震災の概要	10	次世代のために6 菅原 渉 菅原工業(気仙沼市)	74
あした 1 未来へ	13	3 女性技術者座談会 私たちが担い手として生き生きと活躍するために	77
scene1 小学生と保護者のための宿題★自由研究大作戦	14	宮澤 容子(小野良組)、横田 知恵(小野良組)、後藤 美沙紀(佐元工務店)、佐々木 美穂(橋本店)	
次世代のために1 三浦 弘子 「宮城建設女性の会2015」副会長 小野良組(気仙沼市)	18	インタビュー 内田 俊一 建設業振興基金理事長	88
インタビュー 荒川 静香 プロフィギュアスケーター	22	4 対談 震災を体験し、我々が伝承したいこと	91
scene2 大相撲仙台場所	24	遠藤 信哉(宮城県土木部長) VS 千葉 嘉春(宮城県建設業協会会長)	
インタビュー 相沢 良雄 仙台市連合町内会長会事務局長	28	5 資料編	99
scene3 小学生と保護者の建設現場見学会	30	宮城県の予算の推移	100
次世代のために2 白鳥 憲俊 熱海建設(仙台市)	34	宮城県への復興交付金の交付可能額	100
阿部 秀治 熱海建設(仙台市)	37	宮城県内自治体への復興交付金の交付可能額	101
scene4 ツール・ド・東北2016	38	復興まちづくり事業の進捗状況	102
次世代のために3 山内 学治 山庄建設(南三陸町)	44	災害公営住宅の整備状況	103
scene5 「みんなでつくる3Aの防災林」植樹式	48		
scene6 中学生の職場体験学習	52		
次世代のために4 栗村 英樹 宮城県建設業青年会会長 栗村建設興業(仙台市)	56		
scene7 ひがしまつしま福幸まつり	60		
次世代のために5 齋藤 稔 齋藤建設(東松島市)	66		

# M9.0

高さ

# 18.4m

2011 3.11

## 東日本大震災

2011年3月11日午後2時46分

震源は三陸沖(牡鹿半島の東南東130km付近)

マグニチュード9.0(宮城県北部で最大震度7)

津波浸水高は最大18.4m(女川町)

宮城県内の浸水面積は327km<sup>2</sup>

2012 2013 2014 2015 2016

# あした 1 未来へ

あの日、多くのものを失った。  
だが、時間の経過とともに、  
被災地は着実に復興への道を歩んでいる。  
震災前よりふるさとを発展させるには、  
地域とどうかかわっていくべきなのか。  
これまでと同じ活動をしているだけでは  
わかってもらえない。

宮城県建設業協会の  
あした  
未来への挑戦が始まっている。



未来へ scene1 2016年7月29～30日

# 小学生と 保護者のための 宿題★自由研究 大作戦

企業・団体が学習・体験プログラムを提供し、子どもたちの夏休みの宿題や自由研究に役立ててもらうイベントが開かれた。宮城県建設業協会が提供したのは、コンクリートによるペーパーウエイトづくりやラジコン建機による現場体験など。2日間で約2,100人もが協会ブースを訪れ、ものづくりや建設現場を体験した。



イベントは津波が押し寄せた「夢メッセみやぎ」で行われた。



宮城県建設業協会のブースには長蛇の列が。用意した整理券があつという間になくなるほどの人気だった。

# ラジコン建機で 現場体験

被災地のまちづくりを模した  
ミニチュアセットの中で、  
クレーンで荷物を吊り上げたり、  
ショベルカーで  
砕石をすくい上げたり。  
自分の手で  
建機を操作し、  
建設現場を  
体験した。



ショベルカーで、上手に砕石をすくい上げることができた。



ミニチュアセットの中で建設現場を体験できた。



ゴーグルと手袋を着用して、ペーパーウエイトづくりを。

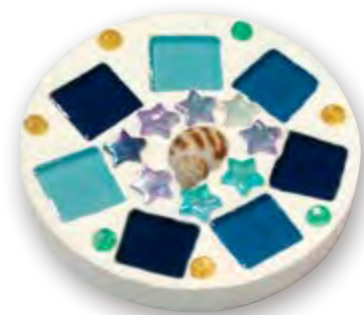


コンクリートに好きな色の粉を混ぜた。



# 自由な発想で 思い思いに

ペーパーウエイトづくりでは、  
手袋とゴーグルを着用し、  
コンクリートに好きな色の粉を混ぜる。  
飾りに貝殻やビー玉、ビーズ、タイルを。  
子どもたちの自由な発想で、  
思い思いのペーパーウエイトができていく。



「この業界は、  
世間でいわれている『きつい・汚い・危険』という、  
いわゆる3Kでは決してなく、  
世の中をつくり、  
夢や希望の持てる職業なんです」  
ということと、  
「ものづくりの楽しさ」をみんなに、  
とりわけ未来あるお子さんたちに  
知ってほしかった。

## 三浦 弘子 氏

「宮城建設女性の会2015」副会長  
小野良組(気仙沼市)仙台支店

小野良組仙台支店建築部工事課長。結婚して子どもを持ちながら、長年にわたって女性技術者として活躍。「宮城建設女性の会2015」の副会長として、子どもたちに建設産業の仕事の楽しさをわかってもらおうと、啓蒙活動にも力を入れる。気仙沼市出身。

# 次世代 の... ために



## 技術職へ

気仙沼市の普通高校を卒業し、地元の設計事務所に入った。初めは事務の仕事をしていた。事務の仕事しながら建築士の資格を独学で取得した。設計事務所には12年くらい在籍させていただいたが、結婚し夫の転勤で仙台に移ることになった。職場が変わらなくてはならなくなり、小野良組に入った。小野良組には経理担当として入ったが、建築士の資格を持っていたので社内の建築部

## 資格

建築士の資格を取ったのは、結婚して子どもができてからだ。子どもが2人いたのだが、下の子が1歳になるかならないかの時期だった。設計事務所にいたので、「建築士の資格を取らなければもったいない」「資格時代が到来するから、再就職する時に有利だろう」と考えた。今思えば、それがよかった。設計や施工管理の仕事が決して嫌いでは

## 啓蒙活動

私は、「宮城建設女性の会2015」の副会長もやらせていただいている。設立されたのは2015年度。かつて「リンクス」という女性技術者の会があり、一時期はさまざまな活動をしていたのだが、停滞して休止状態となっていた。若い人が建設関係の会社に入ってこないリスクがあるので、女性目線で啓蒙活動をした方がよいということで、新たに(技術者だけでなく、事務職も含め女性すべてを対象とする)女性の会を立ち上げたのだと思う。学校に出かけたり、小さいお子さんが集まるイベントに参加したりして、女性目線で話しかけて建設業の幅広さを知らしめる役割がある。(宮城県建設業協会が)宮城県知事や東北地方整備局長に陳情する際に同行させていただくこともあるが、活動の中心は本日の「宿題・自由研究大作戦」のような啓蒙だ。

普段、私は(小野良組に勤める)サラリーマンの1人なので、あまり外には出ないが、今日のようなイベントには将来のお子さんたちのこともかかわってくる。「この業界(建設産業)は、世間でいわれている『きつい・汚い・危険』という、いわゆる3Kでは

門からスカウトされ、足かけ40年くらい建築の設計や施工管理の仕事をやらせていただいている。

私が働きだしたころには、大学を出てスーパーゼネコンに入った女性技術者はいたが、高校を出て地元で働いていた女性技術者は少なかった。現場に行くと「おい、ねえちゃん」と言われた。そういう感覚の時代だった。

なかったので、仕事を続けることができた。ことわざ通り、「好きこそもの上手なれ」だ。

仕事をしてきて、いろいろな思い出がある。50年以上も働いているが、私にとってはすべてがよい思い出となっている。



「宮城建設女性の会2015」と東北地方整備局長との意見交換(2016年2月10日)。

決してなく、世の中をつくり、夢や希望の持てる職業なんです」ということと、「ものづくりの楽しさ」をみんなに、とりわけ未来あるお子さんたちに知ってほしかった。「微力ながらお手伝いできたらいいなあ」との思いで、このイベントに参加させていただいた。また、ご両親、特にお母様へ、建設産業が魅力ある職場だとわかってもらうための働き掛けにも力を入れたいとも感じている。

### お子さんたち

「宿題・自由研究大作戦」では、コンクリートを使ったペーパーウエイトづくりを教えたのだが、お子さんたちは生き生きしていた。つくっていて楽しそうだった。誰も嫌がっていなかった。ただ、つい大人は自分の目線で口を出してしまう。後ろにいる保護者が何かいっても、「今日はお子さんが中心なので、つくりたいようにつくらせてあげてください」という助言はさせていただいた。

お子さんの自由な発想は大事だ。ペーパーウエ

トの飾り付けで、貝殻の中にビー玉を入れた子がいた。そんな発想をした子はいなかったので、「すばらしいね」といったら、喜んでいて、よい笑顔で帰っていった。小学校3年生の男の子だ。

お母様方には、お子さんの能力を伸ばすためにも、芽をつみ取らないでほしい。せっかくよい芽が出ても大人の目で見えてしまう。最後までやらせて、失敗することも経験だ。社会に出てからの失敗はダメだが、小さいうちの失敗は何度でもするとよいと思う。



会場全体では2日間で合計5,596人が来場した(2016年7月29日)。



上：自由な発想を大事に、子どもたちに作業をしてもらった。  
下：子どもたちは生き生きして楽しそうだった。

### 感謝

これまで長く仕事を続けてきてよかったと思う。社会にもまれ、仕事のつながりなどで、私自身が「人」として育てていただいた。正直いって、親の介護をしなければならなかった時などは仕事を辞めようかと思った。辞めないでがんばることができたのは、回りが協力してくださったからだ。感謝の思いが大きい。

今日、このイベントに出させてもらっているのも、回りの協力があるからだ。職場も「特別だぞ」といいながら、いろいろと便宜を図ってくださったので、仕事を続けることができています。

(インタビューは2016年7月29日)

## 小学生と保護者のための宿題★自由研究大作戦

仙台で開かれたのは今回が初めて。東北電力、TSUTAYA、仙台市消防局など25の企業・団体が出展し、2日間で5,596人が来場した。宮城県建設業協会が提供した企画は「コンクリートによるペーパーウエイトづくり」「ラジコン建機による現場体験」のほか、「測量機器による宝探し」「建設機械の試乗」。四つの企画の体験者は2,090人を数えた。主催は日本能率協会。



上：測量機器を使って会場内にある宝を探し当てると、ミニカー建機がもらえる。  
下：会場の外では、子どもたちの好きな建設機械に試乗できるコーナーも。

宮城県建設業協会の企画での体験人数(人)

企画	1日目	2日目
コンクリート・ペーパーウエイト	70	90
ラジコン現場体験	500	550
測量機器宝探し	80	100
ショベルカー試乗	350	350
合計	1,000	1,090

#### 本柳舞子さん(小学4年生 仙台市)

ラジコン建機による現場体験に参加。「楽しかった。将来は建築士か大工になりたい。釘を打ったりして格好いいし、機械を使う仕事は楽しそうだ」。



#### 佐藤瑠唯くん(小学1年生 仙台市)

測量機器を使った宝探しに参加。「(測量機器を読むのは)難しかったけれど、楽しかった。宝がどこにあるかは、だいたいわかった」。

#### 井上陽翔くん(小学2年生 多賀城市)

コンクリートによるペーパーウエイトづくりに参加。「海に流れ出ているものをイメージした。上手にできた。初めてだったが、楽しかったので、またやってみたい」。



## 1人でできることは小さいが よかれと思うことをみつけて 支援をスタートさせた

東日本大震災で東北が大変なことになっていた。仙台で育ったので、たくさんの友人がいた。気掛かりだったので、東北自動車道が復旧すると、すぐに車で仙台に向かった。実際に現地の状況をみないと、自分に何ができるかがわからない。いろいろな方の話をうかがいながら、宮城県内を回った。義援金も送り先がわからなかったの、宮城県庁に直接、持っていった。1人でできることは小さいが、よかれと思うことをみつけて支援をスタートさせた。現地に行って次にできることを探して、その都度、支援を続けてきた。

## どんな思いで がんばっているかを 全国に伝える機会になれば

被災地に行って何かをするのも支援だが、離れた場所から心を寄せて応援することもできる。イベントの際には義援金を募ったりもした。また、東北の現状を伝える連載も週刊新潮でやらせていただいている。農家を応援するJA全中(全国農業協同組合中央会)の企画だ。被災した農家を訪れ、話をうかがって記事にする。最初は、被災した農家が立ち上がる状況を伝える連載だったが、今でも風評被害などと闘っている農家の方がたくさんいる。どんな思いでがんばっているかを全国に伝える機会になればと、連載を続けている。

特に印象に残っているのは、仙台的いちご農家にうかがった時のことだ。津波ですべてがなくなってしまった土地に、ある一画だけ緑が生えてきていた。被災した土地に、率先して戻った農家の方がいたからだ、その勇気はすごい。土地が使い物になるかどうかもわからないし、恐ろしい思いをした場所だ。「戻れるんだ」「もう一度やってみよう」。勇気が回りの農家の方にも伝わり、復興していく姿を見せていただいた。



— 荒川 静香 氏 プロフィギュアスケーター

## できることを、 できる時に、 できる人が、 できる場所で

スケートには「非現実的な世界観」がある。震災直後は、アイスショーなどのイベントを開催してよいのか迷いがあったが、スケート会場にすることで日々の大変さを忘れ、活力をチャージしてもらうことが、私たちの存在意義ではないかと考えた。被災地から離れたところにいる方たちの心をリフレッシュすることで、みなさんに復興支援につながるエネルギーを持ってもらえばよい。

震災後、多くのアスリートに葛藤があったはずだ。震災で練習場所を失った羽生結弦選手も、被災地で苦しんでいる人がいる中、自分が別の場所でトレーニングをして日常に近づこうとしていることに葛藤したのではない。でも、彼ががんばること困難に直面している方たちがポジティブになれたり、彼を応援することでエネルギーを取り戻せたりした方もいるはずだ。それが彼の原動力にもなり、オリンピックや世界選手権でのよい結果につながった。復興

の大きな力になっていると思う。自分が携わっている中で最善を尽くすことが、復興にも通じる。「できることを、できる時に、できる人が、できる場所で」ということだ。何か大きなことをしようするとエネルギーが必要だし、終われば気持ちが途切れてしまうかもしれない。震災が風化しないよう、支援を続けていくためにも大事なことだ。

## 自分がどんな 背中をみせられるのか みせていくべきか

子どもたちは毎日、大人の背中をみている。私の子どもは、もうすぐ1歳10カ月になる。いろいろなことを吸収し、成長につながる大事な時期だ。自分がどんな背中をみせられるのか、みせていくべきかを自問自答しながら日々を過ごしている。年に何回か、子どもたちにスケート教室を行う機会がある。技術的なことを教えるよりも、フィギュアスケートの魅力を伝え、興味を持ってもらうことが大事だ。楽しい時間を過ごしてもらえば、また次にスケートをみたり、滑ったりすることにつながる。

私自身はプロフィギュアスケーターとして毎日練習をしていて、まだスケーターを育てていく段階にはない。だが、いつかは自分が培ってきた技術や経験を次の世代に伝えられたらよいと思う。

## 活動を伝えてもらえれば 建設業の大切さが理解 され将来を見据える子ども たちにも伝わる

かつて宮城県沖地震が発生したことで、宮城県は防災意識が高い。今回の震災から学んだこともたくさんあるので、次の備えに生かしていくべきだし、伝えていくことが大切だ。震災を体験した人が、1人でも多くの人に伝えられるチャンスがあればよい。

震災を受けて建設業の方がどういう活動をしたかも、一般に広く知られるところではなかったはずだ。この(記録誌の)ように活動を伝えてもらえれば、建設業の大切さが理解され、将来を見据える子どもたちにも伝わると思う。まずは活動を知らせることが、大事なつながりを生むのではない。

(インタビューは2016年8月31日)



荒川氏は2015年7月、「仙台うみの杜水族館」のオープニングセレモニーにも出席した。「新しい施設を復興の象徴として大切にしていけることも、私たちににとって大事な活動の一つだ」と話す。

## 大相撲仙台場所

2015年の大相撲仙台場所は  
7,000人の満員御礼だった。  
より多くの人に観戦してもらうため  
2016年は日程を2日間に延ばして開催。  
たくさんのファンが人気力士に声援を送った。



震災復興支援の大相撲が、前年に続き仙台市で開かれた。



白鵬名古屋後援会

迫力ある横綱の土俵入りに、多くのファンが惹きつけられた。



小さな体で力士に向かっていく子どもたちに多くの声援が。

# ちびっこ相撲に 笑顔、拍手

最も会場が笑顔に包まれたのは、  
取り組み前のちびっこ相撲だ。  
小さな体にまわしを締め  
向かっていく地元の子どもたちを  
人気力士が上手にあしらう。  
子どもたちのかわいらしい姿と  
力士のユーモアに拍手が鳴りやまない。



女の子には、ちょっとやさしい対応も。



横綱同士の対戦には、宮城県建設業協会の懸賞幕も。



白鵬関への協会の横断幕も。

# 宮城県建設業協会 も協賛

地域が笑顔や元気を取り戻してくれるならー。  
宮城県建設業協会も  
前年に引き続き仙台場所に協賛した。  
会場の一画を借りて  
震災の記録誌のパネル展示も。  
地域建設業の活動を広報するため  
震災の記録誌は  
仙台市内の全町内会に配布したこともあった。



会場2階では震災の記録誌のパネル展示を行うとともに、記録誌などを無償で配布した。

## 地域建設業のみなさんが一緒に動いてくれたのであれだけ早く道路も通れるようになった

宮城県建設業協会と仙台市連合町内会長会のつながりは、東日本大震災前にはなかった。「震災の記録誌その1」(風化させてはいけない記憶がある)が2012年12月に完成し、「みなさんにみていただく機会はないでしょうか」という相談が宮城県建設業協会からきて、町内会への記録誌の配布が始まった。

「記録誌その1」を最初にみた時の印象だが、地域建設業の人たちが震災時にどのような対応をしたかが、わかりやすく伝わってきた。耳では聞いていたが、自衛隊の活動が中心だった。地域建設業のみなさんが一緒に動いてくれたので、あれだけ早く道路も通れるようになった。

## 正副会長会に諮ると、「ぜひ、配布してほしい」という声が上がった

「記録誌その1」を仙台市内の町内会に配りたいと相談を受けたが、市や県、国などの公的なものは扱ったことがあるものの、宮城県建設業協会から申し出を受けたことはなかった。ただ、未曾有の東日本大震災を考えると、「ことがことだけに配布する意義がある」と思った。仙台市内のすべての単位町内会に配布するには、仙台市連合町内会長会の正副会長会の了解が必要になる。正副会長会に諮ると、「ぜひ、配布してほしい」という声が上がった。

約1,400ある仙台市内の単位町内会まで「記録誌その1」を配布した。その後は宮城県建設業協会に限らず、町内会に有意義なものについては(配布などの依頼を)受け入れようという空気も生まれた。2016年2月に発刊された「記録誌その4」(あれから5年 復興の先の未来へ)も同様に仙台市内の単位町内会すべてに配布した。

# 記録誌を 仙台市内の全町内会に 配布してくれた

— 相沢 良雄 氏 仙台市連合町内会長会事務局長



## 至るところで災害に遭遇する可能性がある。その時に記録誌の内容を参考にしてほしいと考えた

2016年11月には全国自治会連合会の全国大会(約900名参加)が仙台市で開かれ、宮城県建設業協会のご好意で全国のみなさんにも「記録誌その4」を配布させてもらった。これから日本では、至るところで災害に遭遇する可能性がある。その時に記録誌の内容を参考にしてほしいと考えた。仙台市内の町内会だけでなく、全国の方々にも震災時の対応を知っていただくのに、全国大会は絶好の機会だ。

「記録誌その4」を全国大会でも配りたいと正副会長会に諮ると、「それは意義深い」と異論はなかった。また、全国大会に参加した方からも、欠席した人にもみせたいので「記録誌その4」を送付してほしいと頼まれている。

## 地域ごとの防災訓練などで建設業界と連携できる可能性があるなら探っていくことも大事ではないか

東日本大震災によって、仙台市の地域防災も大きく変わった。震災前

は地域防災計画自体も市内統一だった。全市一律の避難所運営が図られていたし、「公助」中心の防災対応だった。震災を経験して「公助」だけではだめだとわかり、「自助」「共助」が強調されることになった。特に避難所については、小学校ごとの地区連合町内会が中心となり、地区内各種団体と市の避難所運営担当課とによる地域主体の運営をしようという機運が高まった。それぞれで「地域版避難所運営マニュアル」づくりが進み、地域主体の災害対応の考え方が根付いてきた。自分たちのつくったマニュアルを防災訓練などに活用するとともに、適宜、見直しを加えられるようになっていく。

災害が起こった時には地域建設業のみなさんの役割が大きい。地域ごとの防災訓練などで建設業界と連携できる可能性があるなら、探っていくことも大事ではないか。

普通は自社の利益のために活動するのだろうが、災害時に地域に貢献する建設業は素晴らしいと思う。いろいろなところで地域建設業の活動を目にする。さまざまな課題もあるが、宮城県建設業協会と仙台市連合町内会長会が連携し合えることもわかってきた。全国大会では「記録誌その4」を提供してもらっただけ

なく、大会への協賛もしてもらった。大会冊子には宮城県建設業協会の広告も掲載されているので、「建設業界とこういうかかわり方もあるんだ」ということを発信でき、全国からの参加者に伝えることができたかもしれない。

## 宮城県建設業協会が(記録誌を作製して)先鞭をつけた意義は甚大だ

震災の記録誌だが、震災直後の段階から復旧・復興を追いかけているのはすばらしい。「記録誌その1」で終わると思っていたが、継続的にフォローされているので、「今後も何かあれば対応してもらえ」という地域建設業の姿を印象的にとらえることができるのではないかと。全国大会に参加して「記録誌その4」をみた人は、震災直後からの様子も全体的にフォローされているので、それ以前の記録誌(その1~その3)はみていなくとも、ある程度全体のイメージをつかめたかもしれない。今後、南海トラフ地震などの災害が発生すれば、全国にある建設業協会の協力が期待できるとわかる。そういった意味でも、宮城県建設業協会が(記録誌を作製して)先鞭をつけた意義は甚大だ。

(インタビューは2016年11月30日)



仙台市内のすべての単位町内会に配布した「震災の記録誌その1 風化させてはいけない記憶がある」。



# 小学生と 保護者の 建設現場見学会

普段は近寄ることができない  
建設現場を見学しにきませんか？  
宮城県と宮城県建設業協会が主催する  
夏休みの現場見学会が開かれた。  
一般公募で仙台市や塩竈市、名取市などから  
子どもたちと保護者が参加した。



建設現場で説明を受け、作業を見守る子どもたち。

真夏日だったので、熱中症に配慮して飲み物が。

# 工夫を凝らした 自由見学

ダイナミックな現場作業を見学した後は自由見学の時間も。  
子どもたちに建設業に興味を持ってもらうため、熱中症グッズの体験コーナーや堤防の上から測量機器で遠くを眺めるコーナーも。  
建設機械に試乗できるコーナーも用意された。



ファン付きのジャケットを着てみると、思ったよりも涼しかった。



測量機器で眺めると、遠くのサーファーの顔までみることができた。



建設機械に試乗できるコーナーも。

## 鋼材をクレーンで 打ち込む作業を 見学

見学したのは、震災で被害にあった  
閑上漁港(名取市)の広浦橋を架け替える工事だ。  
全国にも数台しかない大型クレーンで  
橋の基礎となる鋼材を  
川の中に打ち込む作業を初めて見学する  
子どもたちのまなざしは真剣そのもの。  
たくさんの質問も飛び出した。

鋼材を打ち込む様子を、  
親子で興味深く見守った。



クレーンで川の中に鋼材を打ち込む作業を見学した。

震災前、  
建設業は閉ざされた世界だったように思う。  
ただ、震災後の復旧工事などで、  
建設業ががんばっていることが浸透してきた。  
もっと現場を開かれたものにして、  
子どもたちだけでなく、  
いろいろな人が  
見学会に参加できるようにしても  
よいのではないか。

## 白鳥 憲俊 氏

熱海建設（仙台市）

熱海建設工務部工事長。震災後、仙台湾南部海岸の堤防復旧工事を三つ手掛けてきた。現在は石巻市の北上川の築堤工事の現場にいるが、周辺にはまだ工事がたくさんあり、震災から5年7カ月が経過するのに、まだまだ手を付けていないところがあると感じているという。亘理町出身。



# 次世代 の...2 ために

## 現場見学会

子ども向け現場見学会をこれまで3回開いてきた。きっかけは、会社から「やってみないか」と話があったからだ。当時、私の子どもが2人とも小学生で、「現場をみせる機会があれば」という思いがずっとあった。2014年8月に1回目の「お父さんの仕事場見学会」を開いた。当社の社員の家族を対象にした見学会だった。マニュアルもなく、要領もわからない状態だったので、よその会社の事例をみて参考にした。予算が限られていたので、手づくり的なもので対応した。2回目は、当社と協力会社の社員の家族を対象にした現場見学会だった。協力会社の社員の家族もきてくれたので参加人数も増えた。回を重ねる度に反省点を踏まえグレードアップしてきた。



熱海建設が開いた1回目の「お父さんの仕事場見学会」(2014年8月12日)。

## 一般参加者

3回目は、2016年8月の宮城県建設業協会と宮城県が主催する現場見学会だった。県から協会に、「小学生と保護者向けの現場見学会を開きたい」と依頼があったと聞いている。協会から当社に話がきて、たまたま現場の担当を持っていなかった私が、見学会の企画の対応をすることになった。

今回は、主催が宮城県建設業協会と宮城県だった

ので、裏方に徹しようという思いはあった。一般から参加者を募集するので気を遣う面もあり、一般への対応は協会や県の方がノウハウを持っている。例えば、参加者の安全の確保、雨天時のキャンセルへの対応、会場までのアクセスの確保などだ。話がきたのは見学会の1カ月ほど前だが、打ち合わせも5回程度は行いながら、準備を進めた。

## 工夫

当社の社員の子どものみならず、「現場はこうだ」という話を何となく聞いているはずだが、一般の方は知識がゼロに近い状態だ。工事現場をどう伝えるべきかについては考慮した。建設現場に興味を持ってもらえるよう工夫した。メインが工事現場をみせることだった。橋梁の復旧工事だったので、まずは現場で大きなクレーンを使ってH鋼を打ち込む、インパクトのある場面をみもらった。

その後、自由見学に移ったのだが、熱中症グッズの体験コーナーでは、冷却効果のみせ方にこだわり、サーモグラフィカメラを取り入れた。モニターに冷たくなった部分の色が映し出されて子どもたちに

好評だった。1回目の見学会でもこのコーナーを設けたが、雨で寒かったこともあり冷却効果がいまひとつ伝わらなかった。今回はうまくいったと思う。

測量機器を使って遠くをみる体験も1回目で準備していたが、雨でできなかった。今回は晴れたので、遠くの景色をみることができた。海に浮かぶ大型の客船やタンカーをみてもらいたかったが、残念ながらその日はなかった。仙台市内の観音様などをみてもらった。



工事の説明をすると、予想以上に質問も(2016年8月19日)。



サーモグラフィーカメラで冷却効果を確認できるようにした(2016年8月19日)。

## 評価

今回の現場見学会では、参加した子どもたち全員がアンケートで「楽しかった」と回答してくれ、うれしかった。1回目と2回目の見学会ではアンケートをとらなかった。子どもたちの反応はみていたが、実際の評価はどうかと心配していた。今回、アンケートで好評だったと数字で確認できた。当日、私も各コーナーをみて回ったが、暑いにもかかわらず子どもたちはさまざまな企画に挑戦してくれていた。テレビや一般紙なども取材にきた。

震災前、建設業は閉ざされた世界だったように思う。ただ、震災後の復旧工事などで、建設業ががんばっていることが一般の方に浸透してきた。もっと現場を開かれたものにして、子どもたちだけでなく、いろいろな人が見学会に参加できるようにしてもよいかもしれない。現場は大変だが、そうでもしないと若い人たちに建設業のよさを伝えることは難しいと思う。

(インタビューは2016年11月21日)

## 6 参加者アンケート結果

### 問1 現場見学会は楽しかったですか？

	回答数	比率
楽しかった	14	100
楽しくなかった	0	00
わからない	0	00

### 問2 何が楽しかったですか？(複数回答)

	回答数	比率
橋の工事現場見学	3	21.4
測量機器に触れる	7	50.0
ラジコン機械の操作	11	79.0
ショベルカーなど建設機械に乗る	6	42.9
熱中症グッズ	5	35.7

### 問3 次の見学会があったら、参加したいですか？

	回答数	比率
必ず参加したい	12	86.0
違う建設現場なら参加したい	1	7.0
参加したくない	0	00
わからない	1	7.0

### 問4 参加した感想を教えてください

- 普通にできない経験ができて、とても参考になりました。また参加したいです。
- 他にはあまりこんな体験はないと思うので、今日覚えたことや、いろんなことを知れてうれしかったです。
- いつもはできないものに触れたり、乗れないものに乗れたりしたので楽しかったです。
- 普段入れないところに入れて、すごかったです。
- 建設現場で行っていることを知れて、少し興味がわきました。
- 橋の工事にふれたり、触ったりできたからうれしかったです。
- 工事現場は大変だなと思いました。
- 熱中症グッズの中でも「叩いて冷たくなる」グッズはとても面白いし、持ち運びができるので、とてもいいグッズだと思いました。
- 会場にあった大きなブロックが魚のお家だと教えてもらってびっくりしました。
- いろいろな機械の操縦や、乗ったりできたのですごくいい経験になりました。



熱海建設工務部工事主任。前年は気仙沼市で三陸自動車道の現場を担当していたが、2016年4月から関上漁港広浦橋下部工の現場所長に。岩沼市出身だが、震災前から関上で工事に携わってきたことから、関上の復興に思いを寄せる。

現場では  
私が子どもたちに工事の説明をした  
予想以上に質問などもあったので  
興味を持ってもらえたのではないかと思います

阿部 秀治 氏 熱海建設(仙台市)

## 現場所長として

現場所長として最初に話を聞いた時、「現場を稼働させているところで見学会を開くのは大変だな」と正直、思った。ただ、この現場は大規模で、大きなクレーンも使っている。ちょうどクレーンを使って作業をしているところだったので、「見学会を開くにはよいかもしれない」とも考えた。社内のみんが見学会に協力してくれた。現場だけでなくみんなで行った見学会だ。

## 安全への配慮

現場には、体験コーナーなどを設置するのに十分な広いヤードがあった。現在は消波ブロックの製作を行っていて、一般の方を入れるのは危険だが、見学会を開いた8月19日は仕事が佳境に入る前だった。

ただ、現場作業をみせる場所は、近づきすぎると危険が伴う。作業で使っているクレーンや構造物も大きいので、立ち入り禁止などの措置には

配慮した。広浦橋の上から見学する案もあったが、震災で欄干なども落ちて危険な状況だったので、少し離れた護岸から仮橋の杭をクレーンで打ち込む作業を見学してもらった。クレーンで杭を打ち込む作業をみせたのは、見学会と工事のタイミングによる。杭が沈んでいくのがみえたので、作業が進んでいくのがわかったはずだ。今は仮橋ができあがり、これから広浦橋の撤去が始まるころだ。

## 子どもたち

見学会当日は、天気もよかったので安心した。現場では、私が子どもたちに工事の説明をした。予想以上に質問などもあったので、興味を持ってもらえたのではないかと思います。「地盤に杭が何メートル刺さっているのか」「クレーンはどれくらいの重さを吊り上げているのか」といった

質問があった。同行した保護者からの質問もあった。アンケート結果も好評だったので、子どもたちに建設業の楽しさが伝わったのではないかと。あまりみかけないラジコン・クレーンを操縦し、現場作業を体感できたのもよかった。

## 閉上

この工事では、東日本大震災で被害を受けた広浦橋を架け替えるため、仮橋をつくって迂回路を整備。その後、被災した広浦橋を取り壊して新しい橋を架ける。当社が施工するのは橋脚と橋台までで、橋の上部工は別発注になる。流れている川の中を矢板で仕切り、水を抜いて橋脚をつくるため、

水との闘いになるかもしれない。

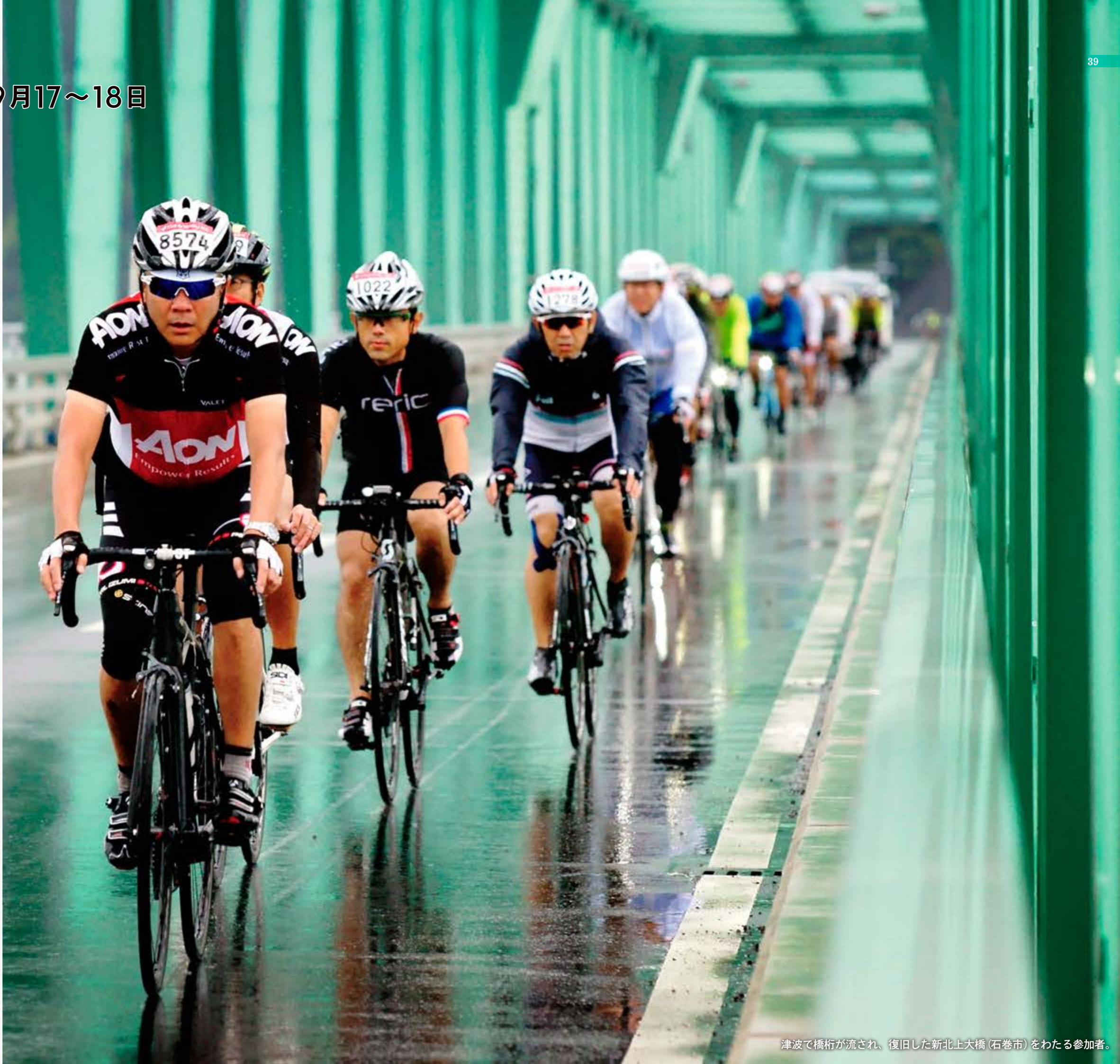
私は震災前に結構、閉上で工事をしていた。震災で壊された広浦橋の工事を任されたのは巡り合わせだ。工事内容が固まっていない部分もあるが、一つひとつやっていくしかない。無事に完成できるよう、日々、がんばっていく。

(インタビューは2016年11月21日)

未来へ scene4 2016年9月17~18日

# ツール・ド・東北 2016

東日本大震災の復興支援と  
震災の記憶の継承を目的に  
4回目のツール・ド・東北が開催された。  
それぞれの体力に応じて  
七つのコースが設定され、  
参加者が被災地を駆け抜けた。



# エイド ステーション

全国からの参加者に  
 地元の食材を使った食べ物や  
 飲み物が提供されるのが、  
 各コースに設けられたエイドステーションだ。  
 南三陸町に本社のある山荘建設も  
 エイドステーションに土地を提供。  
 気仙沼フォンド(211キロ)や  
 南三陸フォンド(170キロ)を走った  
 たくさんの参加者が訪れた。



山荘建設(南三陸町)のエイドステーションに入る参加者。提供・南三陸町

# 沿岸部の 様変わり

参加者が走った沿岸部は  
 津波被害から立ち直り  
 復興に向け様変わりしてきている。  
 南三陸町では、  
 震災遺構として保存が決まった  
 防災対策庁舎の周辺でもかさ上げ工事が進展。



南三陸町には、いまだに多くの工事用トラックが。



防災対策庁舎の周辺では高台が造成され、まちの様子も変わってきた。



南三陸の新鮮な魚介類を使ったシーフードカレーが振舞われた(2016年9月18日)。提供・南三陸町



全てが津波で流された旧北上川河口付近にも建物がみえ始めた(2016年11月20日)。

# 旧北上川河口付近にも建物が

甚大な津波被害を受けた石巻市の旧北上川河口付近。日和山公園から南側を見下ろすと墓地しか見えなかったが、建物が姿をみせ始めた。



3年前には墓地しかみえなかった場所だ(2013年11月)。



# 気仙沼市では 悲願だった 大島架橋が実現



三重県の工場で作られた部材を気仙沼に運んで地組みした。

気仙沼湾に浮かぶ大島と本土を結ぶ橋が実現する。  
気仙沼市内の埠頭で橋梁上部の組立が進んでいて、クレーン船で吊り上げて架設する。  
連絡手段が船舶しかなく、震災では孤立を余儀なくされたが、地域にとって長年の悲願が実現する。



橋長356メートルのアーチ橋となる。2018年度の完成予定だ(2016年11月22日)。

苦勞して求めた土地なので、  
 たくさんの人に有効に使ってもらい、うれしかった。  
 エイドステーションに  
 土地を提供してよかった。  
 社員の休憩施設や駐車場として使うために  
 平らにした土地だが  
 当面は使うことができない。  
 その間にイベントがあるなら、  
 有効に使ってほしい。

## 山内 学治 氏

山庄建設(南三陸町)

山庄建設社長。震災で会社も自宅も失いながら、道路啓開やその後の復旧・復興に奔走。若手に技能を身に付けさせようとしているが、木造住宅は覚えることが多く、技術が必要だ。途中で挫折してしまうことが多く、大工のなり手がいないと嘆く。南三陸町歌津出身。



# 次世代 の...3 ために

## 全滅

南三陸町の伊里前地域に会社事務所と自宅があった。川沿いだったので真っ先に津波が押し寄せ、会社事務所、自宅、作業場、重機置き場、資材置き場が全滅した。翌日、避難先から戻ると何もなかったが、道路を啓開しなければならない。(会社から離れた)土取場や残土捨場に置いてあった重機を持ってきて、最初は軽トラックが走れるくらいの路幅でがれきをよけていった。

連絡手段がなかったので、実家から借りてきたオートバイで走り回り、建機や人の手配をした。とに

## 住宅再建

当社は大工を抱えているので、個人の仮設住宅の建設も行った。体に障害を持つお年寄りがいて、自宅を津波で流されたが、公的避難所である集会所では過ごせないという。仮設的な住宅をつくってほしいと頼まれた。お年寄りの部屋を含め部屋数を確保し、2011年5月末には入居できるようにしてあげた。話を聞きつけ、個人の仮設住宅の依頼がくるようになり、同様のプランで10棟ほどを建設した。みんなが喜んでくれた。

公的な仮設住宅も手掛けた。志津川地域で戸建ての仮設住宅を35棟建設した。南三陸町の発注工事だったが、造成を含めわずか2カ月間で完成させた。2011年のお盆前には入居させるという南三陸町の方針があったので、8月早々に完成させた。町内の屋根業者や設備業者、電気業者を総動員した。

その後も「壊れた住宅を修理してほしい」「個人の仮設住宅をつくってほしい」といった相談がひっきり

## 復興工事

道路の決壊部分の補修や、海の護岸の応急復旧なども行った。がれきの収集・運搬なども1年半ほどやった。そうするうちに住宅の再建工事が始まった。(個人で再建する)戸建て住宅と、(行政が建設する)災害公営住宅の戸建てだ。個人の戸建て住宅も山を削ったり、田んぼを埋めたりする作業から始めなければならない。平らな場所に建てるのではないので、水道を引くなど手間がかか

かく避難所に食糧を届けてやらなければならない。数日後に志津川地域に行ってみると、細浦地区で国道45号が決壊していた。これでは仙台方面から救援物資を運ぶ自衛隊などが入ってくるができない。すぐに現地までバックホウを2時間も走らせ、道路を確保した。緊急事態は10日ほど続いた。あらゆる手段を尽くして、できることを行った。



津波で壊滅し、荒地のようになってしまった伊里前地域(2012年10月5日)。

りなしにきた。顔見知りなので対応に苦慮した。待ってもらいながら対応したが、大変だった。

る。これまで100棟以上を手掛けた。災害公営住宅の戸建ても30数棟を手掛けた。

住宅だけでなく、公共建物の工事も行っている。現在、手掛けているのは南三陸町の庁舎、歌津支所や漁業協同組合の事務所、志津川の復興商店街などだ。



## 会社事務所

会社事務所を失ったが、山の手に下水道工事の現場事務所があったので仮事務所にした。後に、吉野沢地区に畑を借り、プレハブの仮設事務所と駐車場を整備して営業を続けた。2015年12月に現在の皿貝地区に会社事務所を移転したのだが、山だったところだ。木を伐採し、山を削って平らにし、およそ1万平方メートルの土地を確保した。

約80人が共同で保有する山だった。一人ひとり

説得して土地を取得するまでに2年もかかった。さらに土を削って平らな土地にするまでに1~2年を要し、それから建築工事に着手した。自ら設計し、地元の木を使って木造の会社事務所を建設した。



上：たくさんの自転車がある程度の広い土地が必要だった。  
下：地元の方の協力でエイドステーションが運営された。  
3校とも提供・南三陸町。

自転車で石巻方面からきて休憩し、気仙沼方面に向けて出発する中継点だ。1,500人が順繰りにやってきて、食べたり飲んだりして再スタートしていく。苦勞して求めた土地なので、たくさんの人に有効に使ってもらい、うれしかった。エイドステーションに土地を提供してよかった。

本来、社員の休憩施設や駐車場として使うために平らにした土地だが、国道45号の交通量が多いため、気仙沼方面から右折して入ってくるができない。三陸自動車道が開通すれば交通量が減るかもしれないが、当面は使うことができない。その間にイベントがあるなら、有効に使ってほしい。

(インタビューは2016年11月21日)

## エイドステーション

ツール・ド・東北の参加者の休憩ポイントとなるエイドステーションは、2015年まで仮設の伊里前福幸商店街で行っていた。自転車で石巻方面から走ってきて、国道45号の左側にエイドステーションが必要なのだが、2016年は本設の商店街を整備するための造成工事が始まり、仮設店舗は右側に移っていた。国道45号左側に広い土地が必要だったが、ちょうどよく当社の会社事務所に隣接して社員の休憩施設用の土地が空いていた。「貸してほしい」と南三陸町から相談がきた。「1,500人がエイドステーションに立ち寄る」という話だったが、「この土地で十分なら結構です」と返事をした。

当日、参加者への対応は伊里前福幸商店街の人たちがやってくれ、カレーライスや飲み物を提供した。



山荘建設が土地を提供したエイドステーションで一息つく参加者。

# 仮設住宅を 建てる男



日本テレビ news every. より



日本テレビ news every. より

仮設住宅は、災害救助法に基づき行政が建設する。震災直後に山荘建設の山内学治社長が手掛けたのは、個人が建てる民間の仮設住宅だ。実現にはさまざまな課題があり、その奮闘ぶりは日本テレビの「news every.」でも特集として取り上げられた。

タイトルは「仮設住宅を建てる男」(2011年7月26日放送)。依頼主は、南三陸町に住む6人家族だ。おじいちゃんに脳こうそくの後遺症があり、震災後は病院を転々としていた。公的な避難所や仮設住宅では、介護ベッドを置くことができない。「家族6人が一緒に住める仮設的な住宅を建ててほしい」と依頼がきた。事務所と一緒にパソコンも流されたため、山内社長は仙台まで行ってローコストの仮設住宅を設計。資材も手に入らず、木材やサッシは他県から調達した。行政の建築許可も課題だった。民間の仮設住宅は前例

がなく、その安全性が問題視されたが、山内社長は建築基準法の法令を読み込んで建物強度を証明し、建設を認めてもらった。

仕事のなかった地元の大工を集め、急いで完成させた住宅は介護ベッドを置くのに十分なスペースがあり、車いすに配慮したスロープも。久し振りに6人そろって暮らせるようになり、家族に笑顔が戻った。「山荘さんはすごいよ。いい仕事してるね。これだけ喜ばせるんだから、人を一」。依頼主の言葉にすべてが凝縮されている。



# 「みんなで作る 3Aの防災林」 植樹式

津波でクロマツの防災林が  
流出した岩沼市の海岸で  
一般参加者を交え植樹式が行われた。

宮城県建設業協会が  
CSR(社会的責任)活動の一環として、  
宮城県ならびに岩沼市との協定締結により  
0.8ヘクタールを担当し、  
5年間にわたって防災林の再生事業を担う。

※宮城県建設業協会では、三つのA活動(あんぜんに、あ  
かるく、あたたかく)を展開してきた。「3Aの防災林」に  
は、この防災林が「あんぜん」を守り、人々に対して「あ  
かるく」「あたたかい」ものになってほしいという願いが  
込められている。



宮城県建設業青年会の若手メンバーらが受付を手伝った。

植樹式であいさつする宮城県建設業協会の  
千葉嘉春会長。

一般公募したところ、たくさんの親子が植樹に参加してくれた。

# 震災を 風化させずに 将来へ

この日は0.2ヘクタールにまず、  
1,000本の苗木を植樹した。  
震災を風化させぬよう  
植樹したクロマツの成長を  
参加者に見守ってもらうとともに、  
震災を将来に伝えてもらいたい思いがある。  
今後3年間でさらに3回の植樹を行う予定だ。



みんなが協力して1,000本の苗木を植樹した。



## 振り返ると 苗が規則正しく

会員企業の職員が空けた穴に、  
クロマツの苗を持った子どもが駆け寄る。  
苗を植え、土を被せる子どもに  
母親が寄り添う。  
2時間の予定だったが、  
1時間40分後には、振り返るとクロマツの苗が  
規則正しく植えられていた。



会員企業の職員が穴を開ける。



苗を持った子どもが駆け寄る。



宮城県建設業協会の千葉会長も植樹の作業を。



植樹指導者に植樹方法を教わりながら、作業を進めた。

未来へ scene6 2016年11月15～18日

# 中学生の 職場体験学習

仙台市立第一中学校の生徒による、  
建設業の職場体験学習が行われた。  
受け入れたのは前年に続き2回目。  
宮城県建設業青年会のメンバーが対応し、  
舗装工事の作業や測量、施工写真撮影  
社内での事務作業などを体験してもらった。



舗装工事の現場実習。



宮城県建設業青年会の会員会社が中学生を受け入れ、  
職場体験学習に対応した。



舗装工事の現場実習。

# 公園の現場で 測量実習

建設業の職場を体験したのは、  
仙台市立第一中学校2年の  
白鳥智志君と遠澤歩武君。  
最終日には仙台市内の公園の現場で測量実習へ。  
オートレベルを使ってのレベル(高さ)読みや  
トータルステーションを使っての  
測量を体験した。  
学校ではできない体験に  
2人の顔は生き生きと輝いていた。



建設現場で教えてもらうことは、学校では経験できないことばかりだ。



レーザー光線で測量するトータルステーションの操作も教わった。



オートレベルをのぞき込み、  
ピントを合わせてレベルを読む作業を体験した。

※測量実習を体験したのは「(仮称)中山台西公園遊具広場整備工事」(仙台市青葉区)の現場だ。施工を担当し、中学生を受け入れた金福建設の増田和将社長(宮城県建設業青年会事務局長)は、「数ある職業の中から、建設業を職場体験に選んでくれた。彼らのやる気を感じる。建設業は3K(キツイ、汚い、危険)といわれ、大変なことはあるが、それに見合った達成感のある仕事だ」と話す。



“仙台市(発注者)に  
みせるための証拠写  
真(施工写真)を撮ら  
なければならないこ  
ともわかった。むちゃ  
くちゃ面白い。現場の  
中に入ると、もっと知  
りたくなる。(宮城県建設業協会)の建設現場体験  
を選んでよかった”

……………白鳥智志君



“オートレベルのピン  
トを合わせるのが難  
しかったが、やってい  
るうちに慣れてきた。  
レーザーで測る方(ト  
ータルステーション)  
はすぐに高さがわか  
る便利な機械だ。昔と比べて進歩していると思っ  
た”

……………遠澤歩武君

## 職場体験スケジュール

11月15日	10:00	現場見学(小学校改修工事)
	13:00	社内見学・重機見学
11月16日	9:45	現場実習(舗装工事)
	13:00	同
11月17日	9:40	事務作業(出来形管理資料の作成)
	13:00	事務作業(施工写真作成)
11月18日	9:30	現場見学(公園工事)と実習(測量作業など)
	11:00	現場見学(道路橋の完成現場)
	13:15	現場見学(公園の完成現場)
	14:00	現場見学(公園工事)

地道な活動だが

職場体験学習を続けていけば、  
実際には建設業の仕事に就かなくても  
体験は残る。

長い目で見れば、  
建設業への理解促進に  
つながるのではないかな。

## 栗村 英樹 氏

宮城県建設業青年会会長  
栗村建設興業（仙台市）

栗村建設興業社長。2016年7月に宮城県建設業青年会会長に。25歳の時から一般会員として青年会の活動に参加するようになった。「青年会に参加しなければ、全く別の人生を歩んでいた」と話す。仙台市出身。



# 次世代 の...4 ために

## 職場体験学習

2015年から中学生の職場体験学習を受け入れている。仙台市立第一中学校から宮城県建設業協会に依頼があり、建設業の担い手確保を主要事業の一つとする宮城県建設業青年会が担当することになった。最も心配したのは事故だ。車での送迎を含め、安全面を考えると慎重にならざるを得ない。中学校からは「徒歩で行ける現場を」と頼まれたが、ちょうどよい現場がなかったため、仙台近郊の現場で職場体験学習を行うことになった。

メニューもなかった。現場見学と舗装作業体験、アスファルトプラント見学などを行った。見知らぬ大人と接する機会がないので、中学生も緊張して疲れた様子だったが、後にもらった手紙で彼らの思いが伝わってきた。「建設業はものづくりだけでなく、目にみえない貢献を地域にしているんだよ」という私の説明に対し、「知ることができてよかった。建設業を職業の選択肢の一つにしたい」と書いてあった。2016年も11月15日から4日間の日程で、仙台市立第一中学校の生徒2人を受け入れている。

準備は大変だが、普段、青年会のメンバーも中学生と触れる機会はない。学校とのつながりができて

## やりがい

工業高校の「就活ゼミ」で、建設業の仕事を紹介する活動もしている。2016年5月には、仙台工業高校の土木科の1年生に話をした。中学校から高校に上がったばかりで、専門的な勉強をしていない生徒たちだ。

東北建設業青年会の活動として、東北工業大学の学生との意見交換会も行っている。大学生になると、休日やお金といった具体的な話になりがちだが、「地図に残る仕事」がしたいという学生もいた。建設業は、自分がやった仕事（社会に）残るという意味で、待遇にかかわらず充実感を得ることができる。震災後、地域建設業は道路の啓開作業などを担ってきた。震災の話を聞く機会もあり、建設業は責任感や充実感のある仕事だということが、世の中に浸透してきているのかもしれない。震災をきっかけに建

いると感じるし、職場体験学習に積極的に対応したいという会員も出てきた。依頼があれば、これからも職場体験学習を受け入れていきたい。専門用語を使わず、中学生にわかりやすく話すことは、住民に話をするときにも役立つのではないかな。自分の仕事にもプラスになると思う。現場を提供できない会員も、中学生の送迎などで協力してもらっている。地道な活動だが職場体験学習を続けていけば、実際には建設業の仕事に就かなくても体験は残る。長い目で見れば、建設業への理解促進につながるのではないかな。



上：中学生の職場体験学習（2016年11月18日）。

下：東北工業大学の学生との意見交換会（2016年11月14日）。

設業の仕事に就こうという人が多い。親族が建設業の仕事に就いていたことが、入職のきっかけになった人もいる。「俺もやろうかな」と思うのは、家族が建設業の仕事をしていて、誇りを持ってやっていることを伝えているからだろう。

### 多様な道

外で作業をするだけでなく、建設業には管理や設計、測量などいろいろな分野の仕事がある。幅が広いので、自分に合う仕事があるはずだ。体力に自信のある人だけでなく、パソコンが得意な人にも、絵を描くことが好きな人にも道がある。最近の子どもたちはパソコンを扱うのが得意だが、情報通信技術 (ICT) を活用して建設現場の生産性向上を図る「i-Construction」のようなトレンドもある。技術革新で新しい世界に乗っていければ、女性でも現場に対応できるようになる。荒っぽいイメージではなく、カッコいい技術者集団に変わる。



### 実行部隊

2016年7月に行われた小学生の「宿題・自由研究大作戦」では、宮城県建設業協会がブースを出したが、青年会のメンバーも参加して子どもたちをサポートした。建機に乗ってもらったり、ラジコン建機を操作してもらったり、コンクリートでペーパーウエイトをつくってもらったりした。

10月の「みんなでつくる3Aの防災林」の植樹でも青年会のメンバー約20人がお手伝いをした。企画は宮城県建設業協会で行ったが、子どもと接するのは、我々若手の役目だ。植樹の会場は岩沼市だったが、栗原地区や仙南地区、石巻地区、塩釜地区からもメンバーがきてくれた。宮城県建設業協会の活動を盛り上げていこうという気持ちがある。「将来の担い手確保」は、世代的にも近い青年会が接することで、より建設産業の魅力が発信できるよう、我々が実行部隊として汗をかきたい。

社会との接点を持つ機会が増えた。青年会ではかつて「建設フェア」というイベントの開催などを行っていたが、学校と連携して建設業を体験してもらおうといった活動に代わってきた。



上：夏休みの宿題・自由研究大作戦も青年会メンバーがサポートした(2016年7月29日)  
下：岩沼市で行われた植樹にも各地区から手伝いに来てくれた(2016年10月22日)。

### 青年会

青年会の活動を通じて、いろいろな人と知り合うことができた。ライバルではあるが同じ悩みを抱える仲間として、この団体の大切さは痛感している。それぞれ会社経営をしなければならぬのだが、使命感と誇りを持って仕事することに喜びを感じているメンバーだ。同じ問題意識が頭にある。1人では何もできないが、会社が集まって団体として動くところに青年会のよさがある。

(インタビューは2016年11月18日)



大崎支部の会員企業も参加して行われた鳥インフルエンザの防疫演習(2016年11月10日)。

## 鳥インフルエンザや口蹄疫など家畜伝染病にも地域建設業が一役

牛や豚などの口蹄疫、鳥インフルエンザといった家畜伝染病が発生した場合、即座に殺処分や埋設、消毒などの処置が求められる。だが、感染力が高いことから移動制限がかかり、短期間での対応が求められること、また、穴を掘ったり、クレーン等で吊ったりする建設業の要素を含んだ作業であることから、行政職員だけでは対応できない。あまり知られていないが、こうした作業に協力しているのは重機や人員を抱える地域建設業だ。

宮城県建設業協会は2010年9月、宮城県との間で「家畜伝染病の発生時等における緊急対策業務への協力に関する協定書」を締結。万が一の事態に備え、支部ごとに研修や防疫演習を重ねている。2016年11月10日には大崎支部の会員企業5社も参加して、大規模な防疫演習が行われた。宮城県北部地方振興事務所らが主催する演習で、養鶏場で鳥インフルエンザが発生したと想定。全員が防護服やゴーグル、マスクを着用し、重機で掘った穴に殺処分鶏(疑似鶏)を埋設した。

2016年末には青森県や新潟県でフランス鴨や採卵鳥の家さんにおいて、高病原性鳥インフルエンザが確認されたことから、殺処分による

埋却処分等の対応がなされた。宮城県内でも野鳥における高病原性鳥インフルエンザが確認されたため警戒体制に入った。宮城県庁や各出先事務所で連絡会議や打ち合わせ、現地確認などが念入りに行われたが、宮城県建設業協会の関係者も出席し、地域の安全・安心の確保に一役買っている。



宮城県仙台地方振興事務所で行われた鳥インフルエンザに関する関係者会議(2016年12月6日)。

# ひがしまつしま 福幸まつり

甚大な津波被害を受けた東松島市。  
高台移転のための  
最後の防災集団移転促進事業が完成し、  
復興を広く発信するとともに  
全国の支援に感謝するため、  
ひがしまつしま福幸まつりが開かれた。



東松島の八鷹神輿。地元以外の各地の神輿会も参加して復興を祝った。





まつりには多くの人参加し、牡蠣などの特産品が振る舞われた。



左：特設ステージでは歌や演芸のショーも。  
右：さまざまな団体がブースを出した。

# 野蒜北部丘陵団地

福幸まつりが開かれたのは、  
JR野蒜駅のある「野蒜北部丘陵団地」の一画だ。  
牡蠣などの特産品が振る舞われたほか、  
たくさんのブースやイベントも。  
大勢の人が参加し、東松島の復興を祝った。  
これから、にぎわいのあるまちができていくことになる。



まつり会場の背後には、広大な区画が広がっていた。



新たに整備された道路に沿って、まつりが行われた。



野蒜駅からみた野蒜北部丘陵団地。これからにぎわいのあるまちづくりが(2016年12月5日)。

# 希望の虹プロジェクト

JR野蒜駅前では「希望の虹プロジェクト」が。  
 1万人がメッセージを記した  
 ペットボトル型のLEDランタンが  
 2016年11月19日から1か月半にわたり点灯された。  
 復興への思いや希望を込めたイルミネーションが  
 東松島の夜空に浮かび上がった。



野蒜駅前の斜面に「希望の虹」がかけられた。



野蒜駅前のロータリーにはLEDランタンで「HOPE」の文字が。



LEDランタンには、思いを込めた1万人のメッセージが。

かつての

東松島以上に発展してもらいたい。

「住めば都」ではないが、  
自分の住んでいるところは  
よくみえるし、  
愛着がある。  
これから先も  
東松島を出るつもりはない。

## 齋藤 稔 氏

齋藤建設（東松島市）

齋藤建設社長。東松島市の地域建設業として、津波による浸水被害が甚大だった東松島市の復旧・復興に奔走し、悲惨な状況を目の当たりにしてきた。ふるさとの復興を願いながらも、「震災のことは忘れられないし、逆に忘れてはいけない」と話す。東松島市出身。



# 次世代 の…5 ために

## 出動

震災から1時間後には東松島市の災害対策本部に駆けつけた。東松島市長より東松島市の地域建設業に、「すぐにながれきの片付けと人命救助をしてほしい」と要請された。翌朝5時には動き出し、重機を使って道路啓開と人命救助を開始した。最初の1カ月は寝ずに動いた。従業員も震災から3カ月は休みもなかった。

とにかく悲惨な状況だった。東松島市内を区域分けし、各社が分担してながれきを片付ける方式を採ったのだが、自衛隊松島基地（東松島市矢本）の東南側に大曲浜地区の住宅地があった。津波で住宅や人も流され、松島基地東側の蜂谷前地区のあたりで止まった。当社はその区域を担当することになったので、遺体を目にするものもあった。その後は、災害廃棄物の分別や処理も2年ほど行った。



上：震災から数日後の東松島市の被災状況（2011年3月）。  
下：津波で浸水し、東松島市では約1,100人の死者・不明者を出した。

## リストラ

震災前は仕事がなかった。2005年に先代の社長が亡くなり、2009年に大規模なリストラをかけ、約80人いた従業員の中から約20人を減らした。作業員ではなく、管理職が中心だ。当社は下請からスタートし、そのころには元請もやるようになり、国土交通省の仕事もしていたが、年1～2本の仕事を取るだけでは経費が合わない状況だった。

当社が得意なのは重機土工だ。一時は重機も減らしたが、現在はブルドーザー、バックホウ、ローダー、ダンプ、その他を合わせて100台以上あるはずだ。従業員については、復興工事が終われば5～6年で仕事がなくなるだろうという思いがあるので、極

力、増やさないようにしてきた。現在は約80人に戻たくらいだ。

リストラをかけるにも、私の入社前からいた現場監督さんたちに、「申し訳ないけれども」といって辞めてもらわなければならない状況だった。かつて私が指導を受けた人たちだ。いずれまた建設市場が冷えてくる。もうリストラはしたくない。従業員の年齢層が高くなれば定年になり、無理をしなくても自然に減ると思っている。

## 現状と課題

現在は、大曲浜の工業団地の造成工事を担当している。市内業者2社によるJV工事だ。東松島市内では下水道工事も進めているし、他社の下請け工事もいくつかやっている。

また、当社は山土や砕石などの資材販売も行っている。需要はまだあり、宮城県内に供給している。県内でも1社で何カ所も土取場を持っている会社はないはずだ。東松島市内に4カ所の土取場

があり、新たに利府町でも土取場を開発しようとしている。開発許可が下りたばかりだ。

工事を発注しても、内容が固まっていないために着工が延び延びになるケースもあったが、そうした課題も東松島市に関しては解消してきている。ただ、利益的には減ってきていて、工事だけでは十分な利益が出せないのが現状だ。当社は資材販売で利益が出ているのでやっていける。

## 東松島の復興

大曲浜の工業団地に関しても、2018年には工事が終わるはずだ。野蒜北部丘陵団地の造成工事も終わり、これから住宅が建っていく。あと1～2年で東松島の復興の形がみえてくるだろう。ただ、野蒜北部丘陵団地は広いので、すべての区画が埋まるかを懸念する声もある。もともと野蒜地区に住んでいた人はよいが、矢本地区に住んでいた人もいたので、空きが出るかもしれない。

2016年11月に「ひがしまつしま福幸まつり」が開かれたが、特に野蒜地区の人たちにとっては、ある程

度まちの復興の形がついてきたということで、思い入れがあったと思う。東松島市長を先頭に復興に取り組んできたが、成果としてのお祭りであろう。

JR 仙石線が開通し、野蒜駅周辺は1年でかなり様子が変わった。野蒜の丘陵地から海岸に向かう道路の橋梁工事も進んでいる。もう1年もあれば、さらに変わってくるだろう。

私は東松島出身だ。かつての東松島以上に発展してもらいたい。「住めば都」ではないが、自分の住んでいるところはよく見えるし、愛着がある。これから先も東松島を出るつもりはない。



復興の成果として、ひがしまつしま福幸まつりが開かれた(2016年11月20日)。



野蒜北部丘陵団地を走る新たな道路も整備された(2016年11月20日)。

## 若手従業員

震災前は「コンクリートから人へ」などといわれ、建設市場が冷え切ったところで震災が発生し、人手不足に陥ってしまった。資材も労務もそろわない状況になった。この先も人が生活をしていく上で、建設業はなくてはならない業種だ。ある程度の仕事のパイが必要になる。政府には経済政策をしっかりとってもらいたい。

担い手の確保についてだが、震災後は従業員にも若手が入ってきた。約80人いる従業員の3割程度が20～30代だ。既に、現場で休みなしで仕事をしてきたころとは、時代も変わってきた。昔の話をして

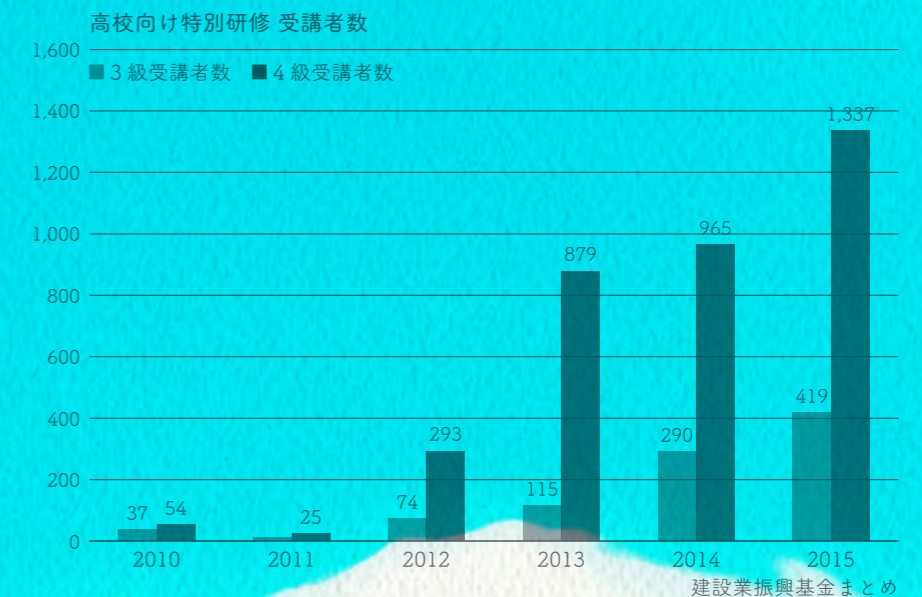
しようがないが、仕事は飯の種だ。若手従業員には何をしても自分でよく考えて、真剣に仕事に取り組んでもらいたい。

(インタビューは2016年12月5日)

# 2 「将来の担い手」確保

## ～高校生、大学生、海外研修生

建設会社が「地域の町医者」として機能し続けるには、技術やノウハウを継承する「将来の担い手」が不可欠だ。工業高校の生徒の入職を促進しようと、宮城県建設業協会では在学中の建設業経理事務士\*の特別研修への助成も行っている。また、会員会社の中には、大学生のインターンシップ(就業体験)を全国から受け入れ、地域建設業の存在意義を伝えるとともに、人手不足を解消するために海外から研修生を受け入れる企業も出てきた。



### ※建設業経理事務士

建設業に特化した会計処理や経理知識に関する資格。3級と4級があり、工業高校の生徒を対象にした特別研修(研修+試験)が全国で行われている。高校生には割引料金(3級は3万1,790円が1万5,000円、4級は2万1,190円が1万円)が適用されるが、さらに受講料の一部を助成する建設業協会もある。宮城県建設業協会の場合、助成により高校生の負担は3級、4級とも2,000円に。1級と2級は建設業計理士と呼称。

## 子どもたちには 付加価値を付けて 社会に出してやりたい気持ちがあった

2013年夏に話があり、宮城県建設業協会と建設業振興基金の担当の方が訪ねてきた。既に建設業経理事務士の高校生向け特別研修に取り組んでいる学校が全国に何校もあり、「宮城県では古川工業高校がトップバッターになってほしい」という話だった。

以前から、子どもたちには付加価値を付けて社会に出してやりたい気持ちがあった。また、本校では女子生徒が半数を占めるが、せっかく(技術者になって)現場に出ても、結婚して会社をやめてしまうことが少なくない。結婚して内勤になっても、建設業経理事務士の資格を生かして会社に長く貢献してほしいということで、女子生徒に資格を取らせたい思いもあった。

## 生徒が就職活動の履歴書に 資格を書けるように スケジュールを組んだ

詳しい話はなく、電話では「説明にうかがいたい」とだけ聞いていた。最初は「どうかな」と思っていたが、4人も訪ねてきて、熱く建設業経理事務士の特別研修について説明してくれた。その時は「建築科で検討します」と返事をした。建築科には7人の教員がいる。建設会社上りの教員もいて「これはぜひ、やった方がよい」という助言をもらい、特別研修を実施することになった。話はスムーズに進んだ。

2014年3月の春休みに初めて4級の特別研修を実施し、建築科の2年生36~37人が受講した。部活の遠征などで参加できない生徒を除き、建築科の2年生ほぼ全員だ。

特別研修は校内で行う。会計士などに講師にきてもらい、研修を受けた後、最後に検定試験を受ける。3月に4級を受験し、その年の7月の三連休を使って3級

を受験させてもらった。生徒が就職活動の履歴書に資格を書けるようにスケジュールを組んだ。

## 特別研修をやってみて 本当によかった。 建設会社に進みたい生徒に っては大きなアピールポ イントになる

特別研修の個人負担はわずか2,000円だ。本来は(建設業振興基金の高校生の特別割引を適用しても)4級で1万円、3級で1万5,000円の受講料が必要なのだが、差額を宮城県建設業協会に支援してもらっている。

保護者も「この価格で受講できるなら、ぜひ、受けなさい」と特別研修を後押ししてくれている状況だ。また、建設会社の方が求人で学校にくるが、「3年前から建設業経理事務士の(4級と3級の)特別研修をやっています」と伝え、「それはすごい。入社したら2級の資格を取ってほしい」といわれる。

生徒にとっても通常の授業とは違い、短期間に講習を受ける機会はなかなかない。講習を受けてすぐに検定試験なので、集中して取り組んでいる印象がある。試験の結果も10日間程度ですぐにわかる。

特別研修をやってみて、本当によかった。就職の際に履歴書にも書けるので、建設会社に進みたい生徒にとっては大きなアピールポイントになる。

昨年は生徒の約72%が就職したのだが、マッチングがうまくいって建設業に進んだ子が多かった。約40年ぶりに求人きた大手ゼネコンもあったし、県外のゼネコンに就職した生徒も10人ほどいた。建設会社も技術者が不足し、フレッシュな高校生を採用して育てたい意向があるようだ。東日本大震災後は求人が増えて

## 2年生で3級を取得して 3年生で2級の講習だけ を受けられるようにしてほ しい

現在の3年生は小学6年生の時に東日本大震災を経験した。住宅をはじめ建物がどれくらい被害を受けているかもわかっている。そういったことを肌で感じて、古川工業高校の建築科を選んだのだろう。「復興の担い手になりたい」という思いがあるようだ。

建設会社に進んだ教え子に期待するのは、一番は「長く勤めてほしい」ということだ。中には、仕事がつら

くて辞めてしまう子もいる。また、技術者として上級の資格を取って会社に貢献してほしい。建設業経理事士の2級、1級もそうだし、施工系であれば施工管理技士の資格だ。設計事務所に進む子なら、2級建築士の資格から始まって、1級建築士を取得してほしい。

宮城県建設業協会に対しては、できることなら引き続き、低価格での受講の支援をお願いしたい。協会には現場見学会やインターンシップ(就業体験)でもお世話になっている。会社での体験は大きく、インターンシップを受けた会社にそのまま就職するケースも少なくない。

また、高校生限定の特別研修には4級と3級があるが、できれば1年生で4級、2年生で3級を取得して、3年生で2級の講習だけを受けられるようにしてほしい。2級は一般受験となるので、検定試験を受けにいかねばならないが、講習の機会を3年生で持てればよい。

建築系分科会という(宮城県内の)教員の研究会があるが、ほかの高校にも声掛けをしたところ、仙台工業高校でも建設業経理事務士の特別研修を実施することになった。今年の夏に特別研修を行ったと聞いている。

(インタビューは2016年10月21日)

# 建設業経理事務士の 特別研修を 受け入れてくれた



— 遊佐 忠行 氏 宮城県古川工業高校建築科長





## 資格を使ってできる業務も増える

庄司 永遠 氏

古川工業高校建築科3年  
(村田工務所へ)

「こういう資格があるよ。受けてみないか」と遊佐先生から建築科のクラス全員に話があ

った。2年生の12月だ。翌年3月に建設業経理事務士の4級の特別研修を受講した。2日間連続で講習を受けた後、すぐに検定試験だったので、家で勉強する時間もなかった。講習を受け疲れていたのに、検定試験では計算を間違えそうになったが、何とか解くことができた。

「取れる資格は取っておけ」といわれているので、母親も受講には賛成だった。3年生の時には部活の大会が重なったので、3級を受講することができなかった。就職活動の時、履歴書の資格の欄に(建設業経理事

務士と)書くことができたので武器になった。就職した後、建設業経理事務士の資格を使ってできる業務も増えるだろう。受講してよかったと思う。

2年生の時に、インターンシップで村田工務所(大崎市)に行かせてもらった。自分がいつも通っている地域で、学校などもつくっている。古川工業高校の校舎も施工したと聞いた。自分もそういう仕事をしてみたいと思い、就職先に村田工務所を選んだ。

インターンシップは3日間だった。現場で施工管理の仕事を見学させてもらったり、一緒に作業をさせてもらったりした。施工管理の仕事は、指示を出して終わりだと思っていたが、職人さんと笑顔でコミュニケーションを取りながら作業をしていた。上から指示を出す怖いイメージがあったのだが、よい仕事だなと思った。

入社したら、回りとコミュニケーションを取ることが出来る社員になりたい。また、大規模な公共施設を手掛けてみたい。(インタビューは2016年10月21日)

# 古川工業高校から 地域建設会社へ

建設業経理事務士の特別研修の話聞いた時、最初に思ったのは「取れるものなら取っておこう」ということだ。せっかくのチャンスなので、2年生の春休みに4級を受講した。

2日間の講習があり、朝8時30分から夕方4時までだった。時々休憩はあったが、長時間の講習はきつかった。検定試験では結構、計算問題が出て、難しかった印象がある。だが、講師の先生が一から教えてくれたので、わかりやすかった。4級に合格した時は、素直にうれしいと思った。建設業に就職したいと考えていたので、よい武器になると感じた。

建設業に入りたいと思ったきっかけは、東日本大震災だ。

平野 潤 氏

古川工業高校建築科3年  
(仙北建設へ)

## 建設業に就職するにはよい武器に

壊れた家を見て、「自分も被災した人たちを助けてあげられないかな」という思いから、建設業を志すようになった。小学校6年生の時だ。

求人施工管理だったが、将来、何かほかの業務をするには必要な資格なので、建設業経理事務士の資格は就職活動にも役に立ったと思う。仙北建設(大崎市)の就職面接を受けた。「東日本大震災で被災した人のために、少しでも復興の役に立てないか」と考えた時、仙北建設は地域密着型の企業だ。被災したまま仮設住宅に入っている人がいるので、安心して住める家を建ててあげたい。

自分も地域のみなさんに愛される存在でありたい。将来的には、職人さんや上司にも信頼される施工管理者になりたい。また、系列会社も保有する、地域では大きな会社だ。公共事業や注文住宅など幅広く手掛けているので、いろいろな仕事にチャレンジしてみたい。

(インタビューは2016年10月21日)



## 震災で建設業の仕事を意識

中澤 亮哉 氏

丸か建設建築部  
(2015年3月古川工業高校建築科卒)

川の現場には行っていないが、志津川で同じように震災で被災された方のための災害公営住宅の建設にかかわっている。

「少しは復興の力になれているかな」という実感はある。

災害公営住宅の現場では主に施工写真の撮影・整理と安全関係書類の整備を行っている。2016年12月には引き渡しの予定だ。3階建て22戸で、木造平屋建ての集会所もある。

今後は、仕事のミスを極力なくし、どんな仕事もこなせるようになりたい。事故やけがを起こさない、起こさせないのも目標だ。これまでの現場はRC(鉄筋コンクリート)造、S(鉄骨)造が主だったので、木造の建物も手掛けてみたい。(インタビューは2016年10月21日)



入社して現場で研修を受け、安全に関することと社会人としての心得を学んだ。約1カ月の研修の後、石巻市の蛇田地区の災害公営住宅の現場に配属された。完成間近だったので、2~3カ月間だ。その後、東北大学の青葉山キャンパス(仙台市)にある農学部の動物研究施設棟や附属棟の新築工場の現場に移り、現在は志津川(南三陸町)の災害公営住宅の現場にいる。

東日本大震災は中学2年生の時だ。母方の祖父母の家が女川町にあり、甚大な被害を受けた。震災復興関連の仕事をしたと考え、古川工業高校に進んだ。中学生の時には、ある程度、建設業を意識していた。高校生活で印象に残っているのは製図だ。提出期限ギリギリの時は朝まで製図の作業をした。製図は遊佐先生にも教えていただいた。

建設会社に入ろうと決めていたので、就職では丸か建設(加美郡加美町)を選んだ。女川町で祖父母が被災して、回りのまちななくなってしまった。私は直接、女

高校2年生の時に特別研修の話があり、既に建設業に就きたいと考えていたので、建設業経理事務士の資格も取ってみようと思った。4級に受かった時、「まだ、(入社後に)仕事で通用するレベルではないな」と感じたので、3年生の夏休みに特別研修を受け、3級も取ることができた。

建設業に就きたいと思ったきっかけは、東日本大震災だ。東松島市にある母方の実家が津波で流された。震災後、実家の回りの建物がなくなったのをみるとつらかった。自分が建てて、復興につなげていきたいと思った。

丸か建設(加美郡加美町)を選んだのは、ホームページに震災復興に力を入れていると書いてあったからだ。2016年4月に入社し、配属されたのは土木の現場だ。涌谷町の河川の災害対策推進工事で、堤防の補修などを行った。7月までいて、現在の登米防災ステーション新築工事(登米市)の現場に移った。除雪機や除雪

資材を収納するため、S造2階建ての建物を建設する。

最初は土木の現場だったので、下請さんはそう多くなかった。だが、現在の建築の現場に移った時、下請さんの多さに驚いた。その分、書類も増えて大変だと感じることもある。現場では、下請さんとの間でわからない専門用語が出たら、後で調べてメモをするようにしている。現場で請求書の確認をする際、労務費、材料費、外注費などさまざまな費目に分かれているが、建設業経理事務士で学んだ知識が役に立っている。

祖父母はまだ、仮設住宅に入っている。私も災害公営住宅の工事に携わってみたい。そのためにはまず、1級施工管理技士の取得が目標だ。(インタビューは2016年10月21日)

尾形 蓮 氏

丸か建設建築部  
(2016年3月古川工業高校建築科卒)

## 請求書確認で知識が役立つ



## 学生への

次回の説明会では、  
「菅原工業のプレゼンテーションは、  
私たちにやらせてほしい」

とまで言ってくれた。

インターンシップを受け入れてよかった。

大学生が変わっていくのがわかったし、

従業員にもやる気が出て、

社内に新しい風が吹いた。

## 菅原 渉 氏

菅原工業（気仙沼市）

菅原工業専務。「被災した地元を何とかせねば」と、従業員や仲間  
間に助けられながら、ただひたすら目の前の仕事をこなしてきた。今後は『このまちをつくる』のコーポレートスローガンのもと、  
地域の課題を解決し地域とともに成長できる企業になっていきたいという。気仙沼市出身。



# 次世代 の...6 のために

上：第2弾として製作した道路工事の構成がわかるタオル。  
中：和菓子店につくってもらった道路を模したお菓子。  
下：大学生が提案したバックホウのクリップ、工具箱に入った付せん、  
カレンダー、工事黒板のメモ帳。

## イメージアップ

震災後、気仙沼はまち中が工事だらけで、建設業  
に対するイメージが悪く、何かある度に「土建屋  
は一」といわれた。何とかできないか。第1弾と  
して、重機をモチーフにしたタオルを製作した。  
子どもは幼いころバックホウが好きだが、いつ  
しか建設業離れをしてしまう。それを止めたか  
った。次に、道路工事が次々に発注されると、片  
側通行で渋滞が発生するようになった。第2弾と  
して、道路工事の構成がわかるタオルをつくった。重  
機を使って路盤工と舗装工を行い、道路ができる流れ  
を1枚のタオルにした。渋滞に巻き込まれても、「こ  
んなことをやっているんだな」と思ってほしかった。

地元の和菓子店に相談して、道路を模したお菓子  
もつくった。アスファルトがようかん、碎石が小豆  
を混ぜたスポンジ、土が茶色いスポンジになってい  
る。当社の安全大会で社員や協力会社に配ったが、



インターネットに写真をア  
ップするとほしいといわれ、  
地元の人にも配った。



## インターンシップ

2016年8月から1か月間、インターンシップ（就業  
体験）で2人の大学生を受け入れた。気仙沼には  
縁のない、法政大学の男子と産業能率大学の女子  
だ。「建設業の3K（キツイ、汚い、危険）を押し  
よくしなさい」というミッションを与えたところ、  
バックホウのクリップ、工事黒板のメモ帳、工具  
箱に入った付せん、カレンダーを提案してくれ  
た。カレンダーは間もなくできあがってくる。ミ  
ッションを与えた背景には、地元の小・中学校、  
高校を対象に実施した建設業のイメージに関するア  
ンケート調査がある。予想に反して、50人中1人は建  
設業に興味を持ってきていた。2人、3人へと増や  
していけるようなものを製作し、アンケート調査に協  
力してくれた学校に配りたいと思っていた。

インターンシップにきた大学生も、最初は建設業に  
よいイメージを持っていなかった。1週間、男子学生  
には現場で実習をさせ、女子学生には現場を回って作  
業員の写真を撮らせた。男子学生には作業をすること  
で、キツイ中でもやりがいを見つけてほしかった。女  
子学生には一人ひとりがどういう仕事を、どれだけ真  
剣にやっているかをみてほしかった。すると2週間目

から、「毎日が  
充実している」建設業の見方が  
変わった」というようになってきた。

彼らには最初から、「建設業の本質は何か」と問いか  
けていた。インターンシップを終える時には、「もの  
をつくるだけでなく、人々の当たり前の日常を当たり  
前にしているのは建設業だ。自分たちが広めていき  
たい」といつてくれた。一番わかってほしかったことだ。

2017年2月には2回目のインターンシップで大学生を  
受け入れる予定。彼らは、インターンシップに興味の  
ある学生への次回の説明会では、「菅原工業のプレゼ



インターンシップで受け入れた2人の大学生（2016年8月）。

ンテーションは、私たちにやらせてほしい」とまでいつてくれた。インターンシップを受け入れてよかった。大学生が変わっていくのがわかったし、従業員にもやる気が出て、社内に新しい風が吹いた。

## 外国人研修生

復興工事が終われば工事量は激減するだろう。だが、現在は人手が足りない。気仙沼の漁業では、インドネシアの船員がたくさん働いている。「漁業にできて建設業にできないはずがない」と思い、急ぎよ、1人でインドネシアを訪れることにした。現地ニーズとして、若者はたくさんいるが、技術を持った人間がいないことがわかった。当社は人がほしい。インドネシアは技術がほしい。マッチすると思い、2年前からインドネシアの研修生3人を受け入れている。2016年6月に



インドネシアからの研修生。特に1期生は、会社の戦力になっているという(2015年6月6日)。

は2期生がきて、研修生は6人になった。言葉や食生活、宗教上のことなどを心配していたが、順応性が高く当社の戦力になっている。

## 合弁会社

研修生はみな、3年間の研修を終えて帰国したら日系企業に勤めたいという。「それなら当社がインドネシアに会社をつくるので、そこで働いてみないか？」という話をした。3年間で習得した技術を帰国後も生かしてほしいと。インドネシアで舗装工事をやっていこうと考えた。

何度も渡航するうちに、インドネシア政府の舗装工事に関するニーズを聞く機会を得た。まず、輸入アスファルトの値段が高い。次に、オーバーレイを何度も重ねているため、舗装が厚くなって歩道と段

差ができてしまう。第三に自然に優しい道路をつくりたい。「それなら、アスファルトのリサイクル合材をつくりましょう」ということになった。リサイクル合材を使えば、アスファルトの使用量も減るし、再生するためにアスファルトをはがすので舗装の厚みも解消する。リサイクルなので自然にも優しい。現地の舗装会社を紹介してもらい、2016年9月に合弁会社を設立した。2017年5月にはリサイクルアスファルトプラントができる予定だ。

## 地域に根付く従業員

私は2017年、気仙沼商工会議所青年部の会長を引き受けることになっているので、建設業もアピールしていきたい。「担い手3法<sup>\*</sup>」なども整備されているが、子どもたちが建設業に興味を示さなければ法律も生きてこない。地元の建設業が小・中学生、高校生と連携を取ることで、子どもたちが建設業の本質をわかってくれるとありがたい。地域に根付く建設業も必要だが、地域に根付く従業員もつくってきたい。

(インタビューは2016年11月22日)



インドネシアを訪れ、リサイクル合材の製造を提案した(2015年4月15日)。

# 3 女性技術者座談会

## 私たちが担い手として 生き生きと活躍するために

建設業界においても、女性の活躍を促進する動きが進んでいる。かつては男性の仕事だと思われがちだった建設業だが、今では作業着を着て颯爽と現場に立つ女性も珍しくなくなってきた。ただ、女性が建設業の担い手として生き生きと活躍するには、残された課題も少なくないようだ。男性ばかりの現場での意思疎通、結婚や出産・子育てと仕事の両立、長時間労働に関する意識の違い…。会員企業の4人の女性技術者が集まり、そうした課題とどう向き合い、いかに乗り越えてきたかを明かしてくれた。

### 出席者

宮澤 容子 氏 小野良組仙台支店建築部技師  
横田 知恵 氏 小野良組仙台支店建築部技師  
後藤 美沙紀 氏 佐元工務店建設部  
佐々木 美穂 氏 橋本店建築部設計課課長補佐

### 司会

伊藤 博英 氏 宮城県建設業協会専務理事

<sup>\*</sup>担い手3法：インフラの品質確保とその担い手確保を目的に改正された「公共工品質確保促進法」「公共工事入札契約適正化法」「建設業法」のこと。



## テーマ1 入社のきっかけと現在の仕事

— 建設産業における女性の働きやすい職場環境を目指し、当協会においても2016年2月1日に新たに「宮城建設女性の会2015」を設置し活動を展開しているところです。本日は、会員企業の女性技術者4人のみなさんに集まいただきました。最初に入社のきっかけや現在の仕事の状況を教えてください。

宮澤 かつて工務店に勤めていたことがあり、一度は建築の仕事から離れたのだが、戻りたい気持ちがあり、2012年に小野良組に入社した。小野良組ではずっと事務の仕事をしていただけたけれども、自ら希望して現場に出させていただけになった。

— なぜ、現場を希望したのですか。

宮澤 工務店に勤めていた時に現場に出ることが多かった。大工さんの手元の作業をさせていただいたり、お客さんとの打ち合わせに出させていただいたりしたが、「また、つくり上げる喜びにかかわりた

い」と思うようになった。

— では、横田さんをお願いします。

横田 小野良組に入り、2016年7月まで気仙沼で災害公営住宅の仕事に携わっていたが、結婚を機に仙台支店に異動した。

入社のはじめは、父が建設業の仕事をしていたから。震災の年に入社したが、2年間は親会社のライト工業(東京都千代田区)で諸現場を経験し、3年目に気仙沼に戻ってきた。気仙沼では、やっと景観として建物が見えるようになってきたところだ。私は当初の壊滅的状况を目にしていなかったが、災害公営住宅の仕事で復興に携わることができたので、よい経験だった。

後藤 大学が建築科だった。高齢者について学ぶ機会があり、高齢者施設に携わることができる会社を探していた。最初は設計の仕事で探していたけれども、「現場をみてから設計に移ってもよいのではないか」という話をいただき、佐元工務店に入社することにした。上司の下で、マンションや老人ホームの現場を管理してきた。



座談会は宮城県建設業協会の伊藤専務理事(左)の司会で進められた。

“とまどいはあったが、現場になじむしかなかった。積極的に職人さんと一服したり、わからないことを聞いたりした。職人さんに女性がいたので、仲良くなって困った時の対応を聞くなどして、現場に慣れてきた。”

後藤 美沙紀氏  
(佐元工務店)



— 会社では女性技術者が1人だと聞いていますが、とまどいはありましたか。

後藤 とまどいはあったが、現場になじむしかなかった。積極的に職人さんと一服したり、わからないことを聞いたりした。職人さんに女性がいたので、仲良くなって困った時の対応を聞くなどして、現場に慣れてきた。

— 最後に佐々木さんをお願いします。

佐々木 大学を卒業して設計事務所に入ったけれども、メーカーのように木造住宅の設計・施工を行う会社だった。仙台に縁ができて結婚と出産を経て、また仕事を探さなくてはならなくなり、橋本店に入社した。設計事務所になかったのは、建設会社の方が拘束時間が短いのではないかと思ったからで、

現在は建築部の設計課にいる。住宅の設計もするが、事務所や倉庫、工場、店舗といった施設系の設計が増えている。

## テーマ2 女性として、復興とのかかわり

— どのような形で復興やまちづくりにかかわってきましたか。その際、女性として困ったことはありますか。

宮澤 震災時には介護職に就いていた。私が小野良組に入った時には、仙台支店としての復旧・復興工事はほとんど終わっていたので、仕事としてはかかわっていない。現在の職場環境は恵まれている。諸先輩のアドバイスを受け、がんばっている。





津波で、かつての光景を失ってしまった志津川（2011年3月）。後藤氏の祖母が住んでいて、後に仮設住宅の住まい方調査を行った。

横田 気仙沼では、大手ゼネコンに女性技術者がいると聞いたことがあるが、出会ったことはなかった。建設業でも女性の活躍を促進する活動が始まり、仙台に移ってから女性技術者と話をする機会が増えた。「こんなにも女性技術者がいたんだ」と思った。女性としての働き方だが、結婚したことで時間の制約もある。仕事をして帰って、好きなものを食べて、寝るだけの生活には戻れない。時間を有効に使い、決められた時間の中で仕事をこなしていかなければならない。仕事に取り組む気持ちも変わってきた。

後藤 震災は大学1年生の終わりだった。震災の5日前に、志津川（南三陸町）に住む祖母のところに遊びに行っていた。祖母は避難所で無事だったが、津波で志津川のかつての光景がなくなっていた。仲のよかった友人も亡くした。ショックが続き、自分が復興に携わろうとは思っていなかった。

大学で高齢者施設の研究をしていて、震災後に仮設住宅に入っていた祖母と知り合いに話を聞いて、仮設住宅の住まい方調査をさせていただいた。調べてみると、仮設住宅には段差があり、狭い上に物が多く、お年寄りが転ぶのではないかということがみえてきて、高齢者に携われる仕事がしたいと思うようになった。介護職を経験してから設計事務所に入

る道も考えたが、「地元で大きな会社に入るより小さな会社に入った方がいいな」と思った時に、佐元工務店を紹介していただいた。老人ホームやRC造のマンション、木造住宅なども手掛けているので、幅広く学べると思って入社を決めた。

RC造の建物を担当した後、木造の老人ホームを途中から担当することができた。設計は別の設計事務所が行っていたが、段差に気を配り、お年寄りにみやすいサインの色にもこだわるなど、勉強になっ



橋本店が建設した復旧事業の職人向け仮設宿舎（2015年8月）。佐々木氏が設計を担当した。

た。

— 大学で建築科を選んだのはなぜですか。

後藤 幼いころから住宅やマンションのチラシが好きで、間取りを考えるのが楽しかった。高校は普通科だったので、建築科に進むことは考えていなかった。高校2年生の後半くらいから校内で聖堂の建設工事が始まり、休み時間になると毎日、廊下の窓から現場を眺めていた。「何が面白いの」とみんなにいわれたが、初めて施工管理の仕事を知り、楽しそうだと思って建築科を選んだ。

— 佐々木さんはどのように復興にかかわってきましたか。

佐々木 震災の時は長男が3歳で、二男を妊娠中だっ

た。息子を保育所に預けながら橋本店で仕事をしてきた。私が最初に担当したのは復旧事業に携わる職人向けの仮設宿舎の設計だ。宮城県内は人手が足りず、他県から職人を呼んでくるための施設だった。一級建築士の試験では、建築確認申請をはじめ本来の手続きを経ないで仮設建築物を建てるための条項に関することも勉強する。「こんな条項を使うことはないだろう」と思っていたのだが、その条項をすべて読み込んで役所に仮設宿舎の建築を認めていただいた。その後は、地すべりで傾いたお宅の新築工事や、南三陸町の銀行の支店の建て替えなどを担当した。銀行を担当した時には、わずかながら復興の力になれたと感慨深かった。

“母親になってからは、常にプランAとプランBを想定しておく。

「次の日の打ち合わせで、

ここまでは議題に載せたい」と思っても、

19時には帰宅しなければならない。

「最低限ここまで」というところから準備をし、時間があれば次に手を付ける。”

////////////////////// 佐々木 美穂氏  
(橋本店)



— お子さんがいて大変だったのではないですか。

佐々木 保育所がなければ成り立たなかった。震災当日も保育所に迎えに行けたのは19時半くらいだ。ライフラインも止まり、先生と子どもたちが毛布にくるまっていた。

現在は仕事量をコントロールしながら、できる限りのことをしている。母親になってからは、常にプランAとプランBを想定しておく。「次の日の打ち合わせで、ここまでは議題に載せたい」と思っても、19時には帰宅しなければならない。「最低限ここまで」というところから準備をし、時間があれば次に手を付ける。そうでないと仕事が立ち行かない。

### テーマ3 女性の活躍に関する環境の変化

—現場で働く女性が増えてきたと感じますか。また、女性への対応が変わってきた印象はありますか。

佐々木 入社した時、社内に事務職の女性はいたが、私が久しぶりの女性技術者だった。設計課の男性職員はだれも着ていないのに、私だけ制服を支給された。最初は着ていたが、着替えなくてはならないので不便だし、時間ももったいない。我慢できなくなったので、上司に「要りません」と話をした。声を上げたら、すんなり主張が通って働きやすくなった。支給した上司の方は、そういうものだと思っているだけで、悪意はない。

後藤 マンションの現場に、左官屋さんで高卒の女の子が入ってきた。美術部で絵を描くのが得意だったが、美大に行けないので左官の道に進もうと決めたという。格好いいなと思った。「結婚したら自分が稼ぐから、だんなさんに料理をつくってほしい」

という勇ましい子だ。クロス屋さんにも、私がいつも相談を持ちかける女性がいる。さまざまな講習会に参加する時にも、作業着を着た女性をみかけるようになり、現場で女性が増えていると実感するようになった。

横田 現場で女性の姿をみるようになった。私が入社した5～6年前にはこのような動きはなく、現場は男性の色が強かった。わかっていたものの、実際に(女性への)風当たりを受けた時には、つらいことも多かった。私も困ったが、娘くらいの年代の子をどう扱っていいのか、回りの男性も困ったと思う。実際に「どうしていいのかわからない」といわれたこともある。「回りと同じに扱ってほしい。できないことはできないといいます」と答えると、それから変わってきた。

今は、職人さんも優しくなっている気がする。時間の経過とともに、現場も変わらざるを得ない状況になってきた。建設業全体で変わろうとしていると感じる。



「宮城建設女性の会2015」による座談会。宮澤、横田、後藤、佐々木の4氏も参加した(2016年9月9日)。

### 「宮城建設女性の会2015」設立会



宮澤 かつて工務店で現場に出していただいていたころは、スーツで出勤だった。現場では大工さんや業者さんに「じゃまだ。どける」といわれ、風当たりが強かった。スーツを着ていてもボードを運ぶなど、やるべきことをやっていると認めてくれるようになってきた。慣れたころに会社に「作業着がほしいです」と伝え、上司と買いに行った。それからは大工さんや業者さんとの壁もなくなり、一緒に飲みに行ったり、釣りに行ったりする関係になった。

### テーマ4 やりがいと女性のネットワーク

—当協会でも以前は「女性技術者の会」「女性経営者の会」を組織していましたが、特定の人に負担がかかるなどしたため、活動を休止していました。建設業における女性の活用促進の流れとともに、あらためて「宮城建設女性の会2015」を立ち上げ

ました。活動に向けアドバイスがあればいただきたい。また、仕事のやりがいについて教えてください。

横田 みんなで協力し合って、一つの建物をつくることにやりがいを感じる。同じように建設業の仕事に魅力を感じていても、自分がやっていけるか悩んでいる女子高校生や女子学生も多いはずだ。「働ける環境があるんだよ」ということを、私たちが何らかの形で示していければよい。

私は、時折、意見発表をさせてもらう機会もあるが、「女性も現場に出て仕事をしているんですよ」と知ってもらえるきっかけを与えていただいていると感じている。(意見発表に)プレッシャーはあるが、女性技術者としての自分の役割だと思っている。

宮澤 工務店に勤めているころから思っているのは、「お客様と一緒に財産をつくって、一緒に喜ぶ



宮澤氏と横田氏が所属する小野良組仙台支店には3人の女性技術者が。支店として女性に対する理解があり、「職場環境は恵まれている」(宮澤氏)という。

“一緒にクロスを選ぶことはできたが、建物内部のことにまで踏み込めなかった。現在は現場に出られるようになり、中まで一緒につくりあげることができる。母親としての経験や介護の経験を生かした提案もできるように成長したい。”

//////////////////// 宮澤 容子 氏  
(小野良組)



ことができる仕事だ」ということ。かつては一緒にクロスを選ぶことはできたが、建物内部のことにまで踏み込めなかった。現在は現場に出られるようになり、中まで一緒につくりあげることができる。母親としての経験や介護の経験を生かした提案もできるように成長したい。

佐々木 一部の男性の中には、「すべてが仕事」という感覚の人も見受けられる。休日出勤も当たり前だし、夜も何時まで職場にいるのか。建設業の長時間労働を変えていただきたい。労働時間が適切に管理されないと、女性は生き生きできない。(子育てをして家庭を持っているので)残業もなかなかできないし、入社も朝礼ギリギリになってしまうのだが、「まだ余裕があるな」という目で見られるのは心外だ。(男

性との)意識的な差が歴然とある。

「女性ならではの視点や、細やかな気遣いで設計してもらった」と、お客様にポジティブに受け取ってもらえることもある。女性が仕事をする上でのメリットだと思う。女性のネットワークについては、メディアで取り上げてもらえると効果がある。私たちが地道にやってきたことが、ようやく脚光を浴びた。今後の女性の入職につながると思う。

— 長時間労働は学生や若年層も気にしています。既に生活スタイルも変わってきました。女性に限ったことではありませんが、働き方についての提案が増えてきています。

後藤 当社には社員満足度委員会があり、社員のやる気をアップさせるために会議をしている。改善提

案制度もあり、社内の問題点や改善点を書いてボックスに入れておくと、役員で検討してくれ、社員を集めた会議で発表される。

直属の上司に相談すると上層部にも話が通やすく、話しやすい会社だ。現場で最初は手元の作業しかできないのだが、「ここは後藤さんに任せるよ」といってくれる。作業が終わると、「ここはこうした方がいいよ」と指摘しながらも、「よくやったね。ありがとう」などといってくれる。

## テーマ5 将来の復興や地域建設業への思い

— 将来の復興や地域建設業への思い、さらには自分

の将来像について教えてください。

横田 気仙沼では、帰宅が深夜になってしまうこともよくあった。あの当時はそれが日常化しつつあった。今振り返ると、よく乗り切っていたなとも感じるが、どんなに忙しくとも、つらくとも、辞めたいとは思わなかった。それは、自分だけが大変なのではなく、回りで働く皆が一様にそうであったから。

もしかすると、東京にいたころの方が辞めたいと思ったかもしれない。働き始めということもあったが、日々現場へ出て職人さんに怒られることも多く、相談できる知り合いもいなかった。ただ、辞めるわけにはいかなかった。本当に大変な時に気仙沼にいない分、何かを勉強して戻らなければという思いが

“この先どうなるかはまだわからないが、子どもを授かっても可能な限り働きたいと思う。建設業で働く女性を取り巻く環境がたった5年でここまで変わった。まだまだ変われるんじゃないかと思う。それを私たちが伝えていく必要もある。”

//////////////////// 横田 知恵 氏  
(小野良組)



強かったからだと思う。

今は結婚もしたが、変わらず仕事を続けさせていただいている。ライフスタイルの分岐点で、会社が仙台に異動して仕事を続けるようにしてくれたのは本当にありがたかった。この先どうなるかはまだわ

からないが、子どもを授かっても可能な限り働きたいと思う。

建設業で働く女性を取り巻く環境がたった5年でここまで変わった。まだまだ変われるんじゃないかと思う。それを私たちが伝えていく必要もある。

横田氏が気仙沼で手掛けた災害公営住宅。いくつもの災害公営住宅を建てる必要があり、多忙な日々を過ごした(2015年9月28日)。





女性の活躍の場はますます広がるはずだし、それぞれの立場で地域建設業を広報し続けることが求められている。

宮澤 建設業界は厳しくなるだろう。震災からの復旧・復興が終われば、インフラの維持管理が仕事の中心になるという人もいる。その時にどういった提案をして、仕事に結びつけていくのか。技術を持った人が高齢化し、若手との間を受け継ぐ中間世代が少ない。私たちが技術をどれだけ受け継げるかだ。自分自身も今のままでは現場で戦力にならない。勉強してスキルアップを図り、資格を取ってがんばっていきたい。みんなで建設業を盛り上げていけるような将来になればよい。

佐々木 まだ復興需要が残っていて、忙しい状況が続いている。少ない人手で対応しなければならないのに、仕事に対する責任は重大だ。もうちょっと、ワークシェアのようなことができればよいのではないかな。

私自身、設計で身を立たい夢があったが、そこからシフトして現在の仕事への付き合い方もつかんできた。仕事の責任の重さに震えることも多々あるが、最善を尽くして問題を解決する仕事は楽しい。

「こういう働き方もあるんだな」と思っている。

— 被災地宮城においては復興需要ということで、依然として膨大な仕事量が日々、施工されています。仕事量が減るといのは、通常に戻っていくということでしょう。ただ、人々の生活がある限り、なくなるのが建設業です。地域の競争力確保や地方創生が叫ばれる中、経済性を考慮すれば幹線道路がネットワーク化されるなど、効率的に活用されるインフラを整備しないと競争に勝てません。また、人々のライフスタイルが変わってくれば、それに応じてインフラや建物のあり方も変わってきます。維持更新も含め、新たな需要も生まれてくるはず。新たな視点として、女性の視点が重要になるでしょう。みなさんの活躍の場はますます広がるでしょうし、建設業の魅力をそれぞれの立場で一般に広報し続けることが求められています。みなさんがこれから建設業に入ってくる女性のお手本になっていくと思います。

(座談会は2016年11月18日)



工事概要を聞いた後、女性目線で安全管理体制をチェックした。



安全パトロール後の講評・意見交換。

## 「宮城建設女性の会2015」 がゼロ災害に向け 安全パトロール

宮城建設女性の会2015(武山利子会長)は2016年12月2日、宮城県建設業協会の労務安全・環境委員会(佐藤元一委員長)と合同で、建設現場の安全パトロールを行った。女性の会からは武山会長ら3人が石巻市の蛇田小学校屋内運動場建設工事の現場を訪れ、女性の目線で作業状況や工事の安全管理体制をチェックした。

供用中の小学校で、鉄骨鉄筋コンクリート造2階建て延べ約1,490平方メートルの屋内運動場を整備する工事だ。施工は日本製紙石巻テク

ノ。工事概要の説明を受けた後、安全パトロールを実施した。この現場では、警備員を増やしたり仮囲いを樹脂製にしたりして、児童がけがをしないよう配慮。女性専用トイレを設け、メッシュフェンスによる目隠しを設置したり、バイオ消臭材を採用したりする工夫も行っていった。パトロール後の講評・意見交換では、こうした点を高く評価する声が相次ぎ、「この機会に、(通学する)子どもたちや保護者に建設業をアピールしてもらいたい」という提案もあった。

## 儲かる産業をつくっていく ベースとして 経理を重視した 経営の考え方は重要だ

高校生が建設業経理事務士の勉強をすることにより、建設業の仕事の流れを経理の面から把握できる。施工だけでなく、経理の面からも建設業を理解してもらえらるという意味で重要だ。資格を取れば、建設業への関心もより高くなる。

担い手の問題を考えていくと、結局は建設業を儲かる産業にしていかなければならない。働きに見合う給料をきちんと払い、その上で儲かる会社であれば人が集まってくる。工事単価のアップには発注者の理解が必要だが、この点は、品確法(公共工事品質確保促進法)の改正によって適正利潤の確保が明確に規定され、大きく地合いが変わった。その上で、自力でしなければならないことは、現場や経営の中から利益を生み出

すこと。儲かる産業をつくっていくベースとして、経理を重視した経営の考え方は重要だと思う。

各建設業協会が受講料の一部を助成するなどし、建設業経理事務士の特別研修をサポートしているのだが、ある地域では建設業協会が諸事情で受講料の助成ができなくなった。受講料が上がってしまうため、特別研修をやめる高校も出てきた。当基金としてもいろいろな形の助成を考えたい。また、特別研修を受けずに直接試験を受けて資格を取ろうとする高校生に対する助成も試行するつもりだ。特別研修についても受講料をさらに安くできないか検討したい。

宮城県では、2016年夏に建築科のある工業高校教諭の研修会が開かれ、当基金が特別研修について説明した。8校が参加したが、(2013年度から特別研修を行っている)古川工業高校に続いて、仙台工業高校や白石工業高校にも輪が広がりつつある。宮城の取り組みには期待している。高校生の受講料は4級であれば通常1万円であるところを2,000円に抑えるために、宮城県建設業協会がかなりの負担をしてくださっていると思うが、これからも支援を続けてほしい。

# 建設業における 担い手確保や 女性の活躍促進に 力を注ぐ

— 内田 俊一 氏 建設業振興基金理事長



## OJTが 十分にできないなら 地域ぐるみでそれを補う 教育訓練の場を

建設業に入った若者のうち高卒では半分が、大卒では3割が3年以内に辞めている。内閣府の意識調査(2012年)によれば、高校生にとって仕事を選ぶ時に大切なことは、「安定して長く勤められる」(64.7%)、「好きなことができる」(59.9%)、「収入がよい」(52.0%)の順だった。「長く勤められる」が一番多いのに高校生の半分が辞めるということは、受け入れる側に問題があるのではないか。

建設業では「背中をみて覚えろ」と、OJT(オン・ザ・ジョブ・トレーニング=現場教育)で教育・訓練をしてきたが、近年は機能していない。理由はいろいろあるが、請負価格を絞られて現場に出せる人が減ってしまった結果、ベテランも若者に仕事を教える余裕がない。加えて、今のベテランが育ったのはバブル期だ。忙し過ぎて、きちんと教えられずに育ってしまった。自分は何とか育ったが、教えるノウハウを持っていないベテランも多いと聞く。現場でのOJTが機能しないので、いつまでたっても仕事を覚えられず、辞めてい

るのではないか。

現場でのOJTが十分にできないなら、地域ぐるみでそれを補う教育訓練の場をつくっていかうというのが、「建設産業担い手確保・育成コンソーシアム」だ。地域連携ネットワークを創設するのだが、宮城には先頭を走ってもらっている。

## 女性が がんばっているのに 評価されていない。 きちんと処遇すべきだ

欧米諸国では、労働人口における女性の比率が46.3%だ。日本は42.8%で、一定レベルに達しているように見えるが、建設業については14.2%に過ぎない。数年後には本格的な人手不足の時代になり、担い手確保の競争が始まるが、建設業は労働人口の半分を占める女性労働市場に相手にされていない。これでは勝てない。女性の活用は必須の課題だという認識を持ってほしい。建設業経理士の2級の合格者は女性が多い。1級の合格者も完成高40億円以下の企業だけで見ると、女性の方が多い。建築施工管理技術検定の合格者の増加率も、ここ数年は女性の方が高い。女性ががんばっているのに評価されていない。きちんと処遇すべきだ。

## 先生にいわせると 求人票がこないという。 きちんとアプローチを するべきだ

「就職先として建設業が嫌われている」と嘆く建設会社の社長が多いが、工業高校の先生にいわせると求人票がこないという。きちんとアプローチをするべきだ。就職は、子どもたちにとって一生にかかわる大事な選択だ。「この会社にはどうか」とアドバイスするには、先生が会社を信頼していなくてはならない。「顔がわかる会社だ」「最後は社長だ」ということになる。地域に会社があれば何度でも顔をみてもらえる機会がある。大手ゼネコンや県外企業にはできない。

また、子どもたちの親と建設業界との距離が遠い。特に母親は子どもが建設業に入るのを反対するというが、間をつないでくれるのは先生だ。先生と信頼関係を築くことが、親をつないでくれることにもなる。各建設業協会の女性部会が母親と話し合う機会をつくってもよい。(担い手確保に向けて)やれることはまだまだある。

(インタビューは2016年12月19日)



## 仙台市内で熊本建協と意見交換

2016年4月14日に熊本地震が発生。熊本県建設業協会(熊本建協)の要請を受け、宮城県建設業協会(宮城建協)は6月3日に仙台市内で「災害に関する懇談会」を開き、熊本建協の幹部と直接、意見交換した。東日本大震災の経験を踏まえ、復旧・復興事業に的確に対応しながら、非常事態の中で経営を維持していくための課題や注意点を伝えた。

強調したのは、「現場の実態を正しくスピーディーに伝えること」の重要性だ。東日本大震災では資材や労務単価が高騰し、発注者の積算価格と実勢価格に乖離が生じた。このままでは復旧・復興工事をやるほど赤字になり、会員企業の倒産を招きかねない。宮城建協では、すぐに被災地の施工実態を調査し、価格の乖離の実態を報告書にまとめ、国に提出したところ、乖離を補正する「復興歩係り」や「復興係数」の導入につながったという。国に要望するにあたり、裏付け



「災害に関する懇談会」には、宮城建協から千葉嘉春会長ら10人が、熊本建協から森光也阿蘇支部長(熊本地震に係わる諸問題勉強会委員長)ら5人が出席した。

となるデータを示すとともに、調査に第三者を交えることでデータの信頼性確保に努めた。

# 平成28年熊本地震への対応

## 東日本大震災の経験を全国に

### 調査依頼に回答、被災地特例適用へ



熊本県の阿蘇大橋地区では大規模な斜面崩壊が発生した。

宮城建協は、熊本地震から1週間後には復旧事業で想定される課題をまとめ、熊本建協に文書で伝えるとともに、全国建設業協会を通じて義援金も送っている。また、熊本県では昨年9月以降、入札不調の割合が上昇傾向にあったことから、2017年1月17日にも被災地の施工確保対策等において効果的な事項についての調査依頼があり、翌日には文書で回答している。被災地の経験が生かされ、東日本大震災で採用された被災地特例の「復興歩掛かり」「復興係数」等の各種施策が2月以降、熊本地震にも適用されることとなった。

## 4 対談

遠藤 信哉 氏(宮城県土木部長) VS 千葉 嘉春 氏(宮城県建設業協会会長)

### 震災を体験し、 我々が伝承したいこと

東日本大震災から5年数カ月が経過し、宮城県の復興は「宮城県震災復興計画」で定める「再生期」の折り返しを過ぎた。内陸部の災害復旧工事はほぼ完了し、津波被害を受けた沿岸部では防潮堤や河川堤防の工事が最盛期となった現在、宮城県土木部長の遠藤信哉氏と宮城県建設業協会会長の千葉嘉春氏に対談してもらった。遠藤氏は2013年4月に土木部長に、千葉氏は2016年5月に会長に就任。それまでは土木部次長、専務理事の立場でトップを支えながら復旧・復興の最前線に立ち続けてきた。震災を体験した2人は何を語り、何を未来に伝承しようとしているのか。

## テーマ1 これまでの復旧・復興

遠藤 東日本大震災の前年6月に土木部業務継続計画（土木部BCP）の運用を開始し、3カ月後には宮城県建設業協会との防災協定の内容を変更していた。半年後に震災が発生し、土木部BCPに基づき協会のみなさんに活躍してもらった。会社が被災したり、社員が被害にあったりして大変だったが、自社の資機材などをフルに活用して迅速に対応してもらった。震災から4時間後には6割の建設業者が道路啓開やがれき撤去に携わっていた。昨日のように思い浮かべることができる。

千葉 震災後、各支部に連絡を取ったが、それぞれが防災協定等にもとづき既に動いていた。協会本部においても、県庁等の行政機関に直接足を運び対応を打ち合わせした。会員企業に依頼し、夜のうちに土のう袋をつくってトラックに積み、橋と道路の段差解消を行ってもらった。その後、道路啓開や時間の経過とともに、地域建設業としてご遺体の仮埋葬や水産加工物の海洋投棄なども手伝った。当協会が地元から頼りにされる団体だと強く感じた。

遠藤 地域建設業は地域に精通し、地域のことをよく知っている。強みをフルに生か



津波で壊滅し、常磐線の運転が2016年12月に再開されたJR坂元駅。内陸に移動して、まちづくりと一体で復旧工事が進められた（2016年2月28日）。

し、極めて効率的に対応してもらった。もし、いなければ応急復旧やその後の対応に手間取り、時間がかかったはずだ。

震災から5年8カ月が経過し、内陸部の災害復旧工事はほぼ完了。津波被害を受けた沿岸部では防潮堤や河川堤防の工事がピークを迎えている。県全体で2,310カ所の災害復旧箇所があり、2,278カ所（全体の約99%）で工事に着手し、うち2,004カ所（約87%）が完成した。金額ベースでは6,956億円の災害復旧費だが、完成率は21%だ。工事規模が大きいので工期を長くとっているため、箇所ベースに比べると金額ベースの完成率は上がっていないが、工事は着実に進んでいる。

災害公営住宅は1万5,993戸の整備を予定していて、1万4,537戸の事業に着手し、1万1,910戸（約74%）が完成している。

2016年度末までに1万4,000戸、全体の約

88%を完成させる計画だ。まだ3万人近くが仮設住宅に住んでいる。恒久的な住宅に住んでもらうため、防災集団移転促進事業や土地区画整理事業も実施している。早期に造成を終えて住居が建てられるよう、全力を挙げなければならない。

## テーマ2 さまざまな課題への対応

遠藤 どういった課題があったかだが、被災した市町が復興まちづくりを進めようとする時に、首長は避難所の設営やがれき処理、遺体収容などの業務に忙殺され、復興まちづくり計画の策定を進められないジレンマがあった。県としてたたき台となる計画案を提示し、市町の復興まちづくり計画の策定を支援させてもらった。

その流れで本格的な復旧事業が始まるのだが、最も深刻だったのはマンパワーの問題だ。発注者である我々も、受注者である建設業のみなさんも、（建設事業が落ち込み）人材が縮小する

局面で被災した。一気に工事が膨大になったので、資材不足や入札不調が発生し、工事が進まなかった時期もある。一方、被災地域では、相続の問題があったり共有地であったりしたため、用地買収が難航した。思い描いたような形で復旧・復興が進んでこなかったことも事実だ。

課題を解消するため、資材関係でいえば生コンの仮設プラントを沿岸部に4カ所設置した。入札不調の解消に向けては、大手ゼネコンの協力も視野にWTO案件を出しながら、ロットを大きくした工事を発注した。発注者支援としては、建設コンサルタントに外部委託をして、我々の業務の一部を担ってもらった。そうした工夫を組み合わせる乗り切ってきた。

千葉 震災前の直近で、宮城県発注工事は年間1,000億円程度の事業量に減っていた。震災後は5～6倍の事業量が発生し、需要と供給のバランスが取れなくなって資材関係も不足した。発注者である県には復興JVという制度をつくってもらったので、他県の建設業とJVを組むことができるようになり、他県の力も借りながら事業を進めてきた。また、資材の需要と供給バランスが崩れる状況の中で、生コンを使わなくて済むようコンクリート二次製品を活用する

東日本大震災時には、専務理事として宮城県建設業協会の窓口となり、地域建設業として組織を挙げた対応に奔走した。事業量が一挙に膨らんだために想定外の課題が次々と発生したが、実情を踏まえ宮城県や国に要望を行うなどの活動も。2016年5月に会長に就任。2016年6月からは東北建設業協会連合会会長も務める。大郷町出身。

**千葉 嘉春 氏** 宮城県建設業協会会長

東日本大震災が発生した2011年3月には宮城県土木部の技術参事兼道路課長を務めていたが、翌月には土木部次長に。未曾有の災害に伴うさまざまな課題に対応しながら、被災地の復旧・復興に努めてきた。2013年4月には土木部長となり、宮城県の創造的復興に向け指揮を執る。仙台市出身。

**遠藤 信哉 氏** 宮城県土木部長





現在も復興係数があるから、何とか地域建設業として仕事ができている。来年度以降も被災地の実態に合った被災地特例の諸施策の継続をお願いしたい。

など、効率的な仕事ができるようにしてもらったので非常に助かった。人材不足で他県の人材を活用する必要があったが、出張費も宿泊費もかかる。設計変更で対応できる仕組みもつくってもらったので、円滑な施工確保対策に結びついた。

遠藤 繰り返しになるがマンパワー不足が一番の課題だった。発注者側でいえば、全国の都道府県から多くの職員に応援に来てもらった。ピーク時には全国から130人を超える職員が土木部にきていた。また、外部委託を活用し、なるべく職員の負担を軽減した。工事の発注ロットを大きくすることも(マンパワー不足)対策の一つだった。

一方、受注者側に向けては、入札・契約制度を簡素化したり、建設現場への技術者の配置要件を緩和したりして、工事を進めやすくする対応をした。宮城県建設業協会をはじめ、建設業のみなさんにしっかり応えてもらったので復旧・復興が進んだ。土木部BCPにのっかって防災協定を結ばせてもらったこともあり、建設業界は大きな力になった。

千葉 これまでにない工事量への施工確保対策を講じてもらった。被災地の現状を的確につかんで、(間接費の割り増しを行う)復興係数などの対応もしてもらったので、円滑に工事を進めることができた。ただ、現在も復興係数があるから、何とか地域建設業として仕事ができている。資材対策会議による資材団体からの情報によれば、2017年度がコンクリート二次製品や鋼矢板、覆工板等資材の納期が最盛期になるという。来年度以降も被災地の実態に合った被災地特例の諸施策の継続をお願いしたい。

### テーマ3 創造的復興に向けて

遠藤 村井嘉浩宮城県知事が「創造的復興」という言葉

を使う時に、象徴的に取り上げるのが仙台空港の民営化だ。2016年7月に完全に民営化して、東急電鉄グループに運営を任せているが、民の力をフルに活用しようとする流れの一環だ。もうひとつが、仙台市の宮城野原地区に整備を予定している広域防災拠点だ。宮城県内には、災害時にロジスティクス機能や集結基地的な機能を持った場所がなかったため、東日本大震災で現場が混乱した。消防や警察、さらには物資が集結できる基幹的な防災基地をつくろうと整備を進めている。



関東・東北豪雨災害が発生した際も、災害協定に基づき宮城県建設業協会の会員企業が出動した(2015年9月14日)。



マンパワー不足が一番の課題だった。発注者側でいえば、全国の都道府県から多くの職員に応援に来てもらった。ピーク時には全国から130人を超える職員が土木部にきていた。

この二つは象徴的施設だが、創造的復興ということであると、今回の津波被害では同じ場所で同じまちをつくれないう宿命的要因がある。三陸沿岸では、高台に住居を移して新たなまちづくりを進める。仙台湾南部の平野部では、内陸に市街地を移転して新たなまちを形成する。創造的復興という意味では、そうしたまちづくりも一つの伝承ではないかと考えている。

千葉 まちなみが変わり、以前とは違う効率的なまちづくりを進めているのだと思う。名取市閑上などは

高台の造成が終わりつつある中で、戸建て住宅もみえ始めた。災害公営住宅の姿もみえてきて、その外側には水産加工場も建って営業が始まっている。あのような震災があり、別なまちに変わっていくお手伝いをさせてもらっているのも、感慨深いものがある。

### テーマ4 地域建設業の位置づけ

遠藤 東日本大震災の復興需要が落ち着くと、建設産業を取り巻く環境は震災前より悪くなるかもしれない。末永くパートナーとしても歩んでもらうため、2016年3月に「新・みやぎ建設産業振興プラン」を策定した。これからも建設産業に県土基盤の維持管理をしてもらうため、振興プランを推進しようとしているところだ。

千葉 地域建設業として今回の震災に対応してもらったが、事業量に比例して、最盛期には約520社あった協会組織も半減してしまった。だが、地域の雇用・経済も含め、地域建設業の位置づけがあるはずだ。地域の基幹産業でもあり、雇用や経済も支えている。県民の安全・安心も担っている。現在の復興需要が終わった時(の経営環境の悪化)が最も心配される。宮城県建設業協会は、宮城県から災害対策基本法に基づく指定地方公共機関の指定も受けている。今後とも地域建設業が、安全・安心を守る「地域の町医者」として存続し続けることは大事になってくるはずだ。

遠藤 2015年9月にも関東・東北豪雨災害が発生した。8年前には岩手・宮城内陸地震があり、宮城県は災害が多い県だ。自然災害が頻発する中で、県土の適切な維持管理を行うという意味でも、地元の建設業の力を借りなければならない。これからは「地域の

町医者」として活躍してほしいし、それぞれが企業経営を維持していくための仕組みづくりにも、しっかり取り組んでいかなければならない。

千葉 宮城県建設業協会では、鳥インフルエンザや口蹄疫の問題にも対応できるよう宮城県と協定を結んでいる。さまざまな問題への対応力を維持するにはどうするのか。地域建設業だからこそ、地域の安全・安心を守ることができる。地域にあり続けることが大事だ。我々だけでは対応できない問題なので、行政にも理解していただければ幸いだ。

## テーマ5 建設業の担い手確保

遠藤 建設業には悪い意味での3K(キツイ、汚い、危険)があって、若い人たちが入ってこない。だが、「給料」「休暇」「希望」というよい意味での3Kもあるという。そういったことを具備しながら、若い人たちが建設産業に携われる環境をつくらなければならない。品確法(公共工事の品質確保の促進に関する法律)の改正を含めて、建設産業の担い手の確保がされている。いかに実践していくかが問われている。週休2日を含めて、若い人がしっかりと給料ももらって、充実した仕事ができる環境をつくっていくのが我々の責務でもある。

千葉 人口が減少する中で、特に18歳人口が減っている。秋田県では10年後に18歳人口が25%程度も減少するという。建設産業は高齢化が進み、50歳を過ぎた技能労働者が4割程度を占める。10年後には当然、人材不足になるが、他産業に比べて離職率が高いという問題もある。入職して3年後には高卒の半分が、大卒の3割が辞めていく。原因は休暇が取れない、給料が安いということだ。

現実的に、現場で働く職人は日給月給制度が多い。



小学生と保護者の現場見学会を開くなど、地域建設業への理解を深めよう活動も増えてきた(2016年8月19日)。

1日でも多く働かないと給料が増えない。週休2日になれば収入が減る。建設産業は屋外産業なので(稼働日数が)天候に左右されやすく、他産業に比較すると年収も低い。屋内産業と同じように週休2日を導入した場合には、収入が減ってしまう。その分の手当が必要である。現実を押さえた形で週休2日を進めていかないと、会社もたなくなってしまう。

## テーマ6 経験の伝承と広報活動

遠藤 未曾有の災害を経験して、私たちがどのように復旧・復興したかをしっかりと記録にとどめ、後世の子々孫々に伝えると同時に、他の地域で同様の災害が発生した時の参考にしてもらいたいと、宮城県では「3・11伝承・減災プロジェクト」を進めている。「ながく」伝承する、「ひろく」伝承する、そして「つなぐ」伝承をするためのプロジェクトだ。プロジェ

クトに賛同し、伝承・減災を後押ししてくれる人を公募し、「伝承サポーター」として認定する制度も活用したい。今後、しっかりしたものをまとめて全国に発信したい。

千葉 経験したことのない大災害の中で、地域建設業として最大限の対応をさせてもらった。仙台市内に約1,400ある町内会にも震災の記録誌を配布したが、一般の市民から「地域建設業がこんなこともやってたのか」というありがたい電話やハガキももらった。一般に対する広報活動は大事だと思う。

遠藤 東日本大震災でも関東・東北豪雨でも、建設業に迅速に対応してもらったことは、県民も広く認識しているところだ。風化させることなく、県民の意識に根付いてもらえるようなPRや広報活動をしなければならない。建設業のみなさんには、東日本大震災などの教訓を生かした形で経営体質を強化し、将来的にも「地域の町医者」として活躍してほしい。

千葉 宮城県との共催で、小学生と保護者の現場見学会もやらせてもらった。岩沼では一般の方も交えて防災林の植樹も行ったが、地元紙も記事として取り上げてくれた。地域建設業を取り巻く環境は変わってきたし、理解度は上がっていると思う。今後もそうした活動を続けていきたい。地域の安全・安心を守りつつ社会貢献度を高め、建設業の位置づけを大事にしていくべきだと思っている。

(対談は2016年11月30日)

現場で働く職人は日給月給制度が多い。  
屋内産業と同じように週休2日を導入した場合には、  
収入が減ってしまう。  
現実を押さえた形で週休2日を進めていかないと、  
会社もたなくなってしまう。

風化させることなく、  
PRや広報活動をしなければならない。  
建設業のみなさんには、  
東日本大震災などの教訓を生かした形で経営体質を強化し、  
将来的にも「地域の町医者」として活躍してほしい。



地域をずっと守っていくために、

解決すべき課題がある。

安全・安心で快適な暮らしを支える

「地域の町医者」としての使命や技術、ノウハウを  
次世代に継承しなければならない。

いずれ、俺たちは引退する。

子どもたちや学生、さらには女性。

高い志を持ち、

将来の担い手となる仲間を増やさなければ…。

地域建設業のDNAを引き継いでいくことは、  
震災を体験してきた者の責任でもある。



## 5 資料編

宮城県の予算の推移

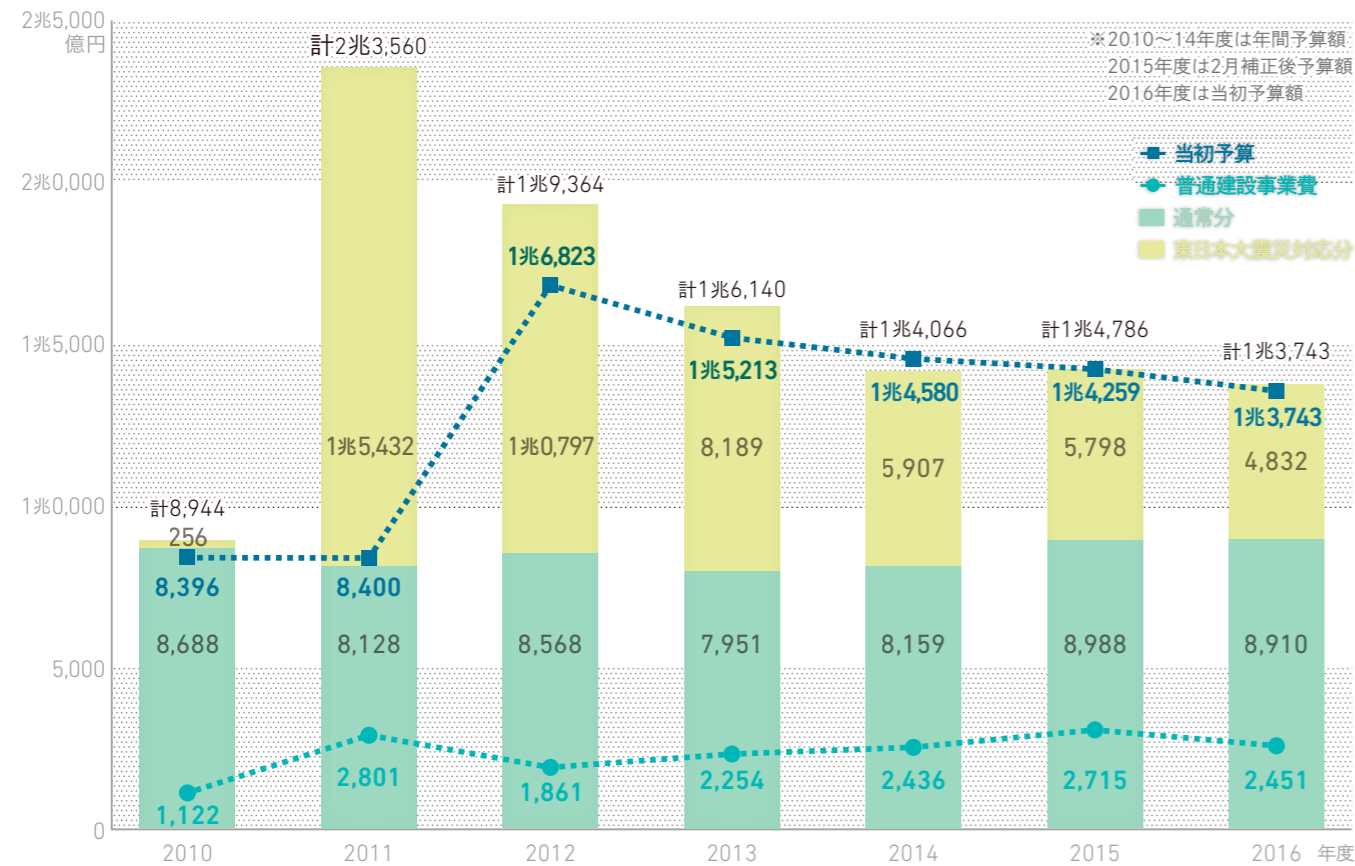
宮城県への復興交付金の交付可能額

宮城県内自治体への復興交付金の交付可能額

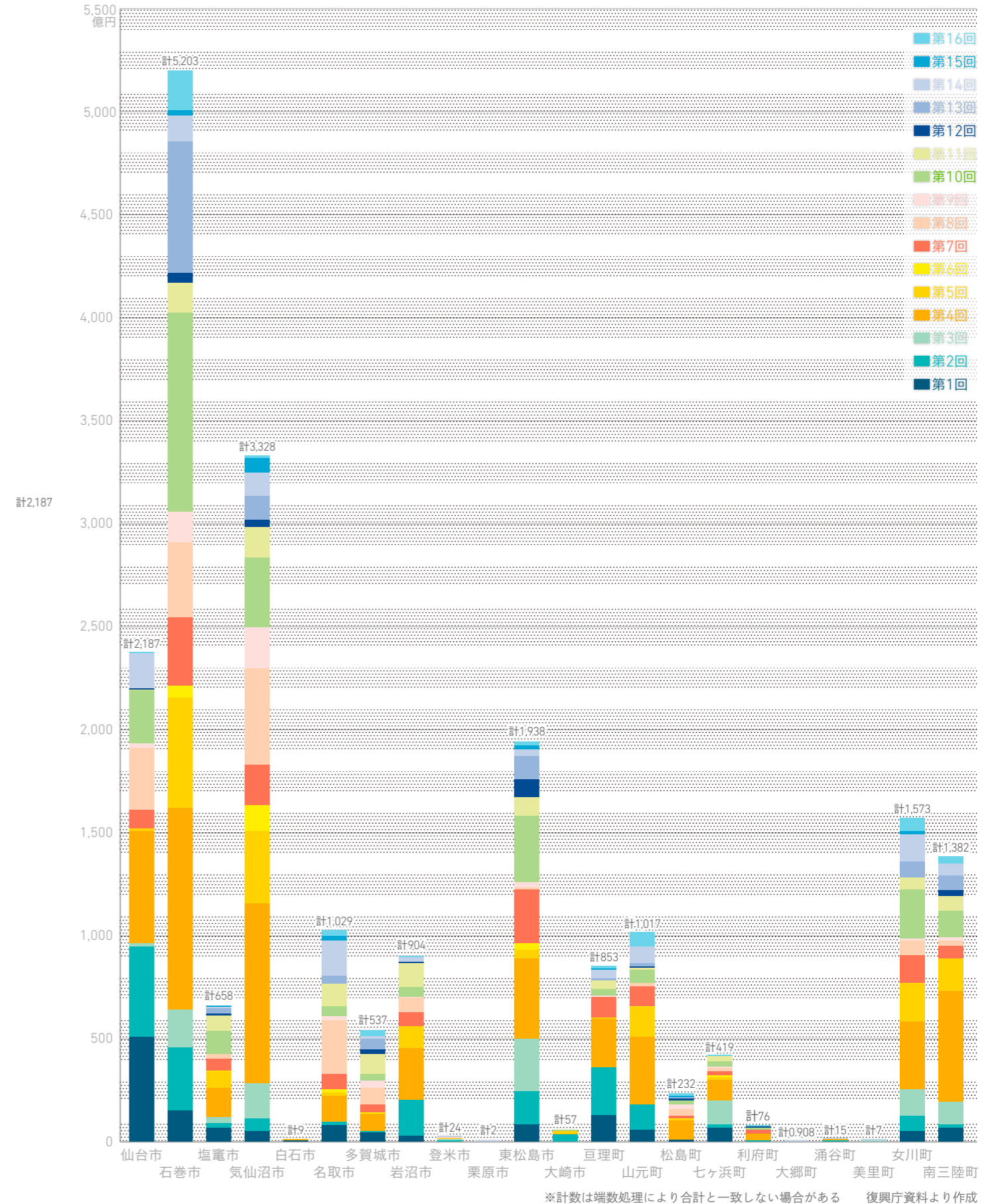
復興まちづくり事業の進捗状況

災害公営住宅の整備状況

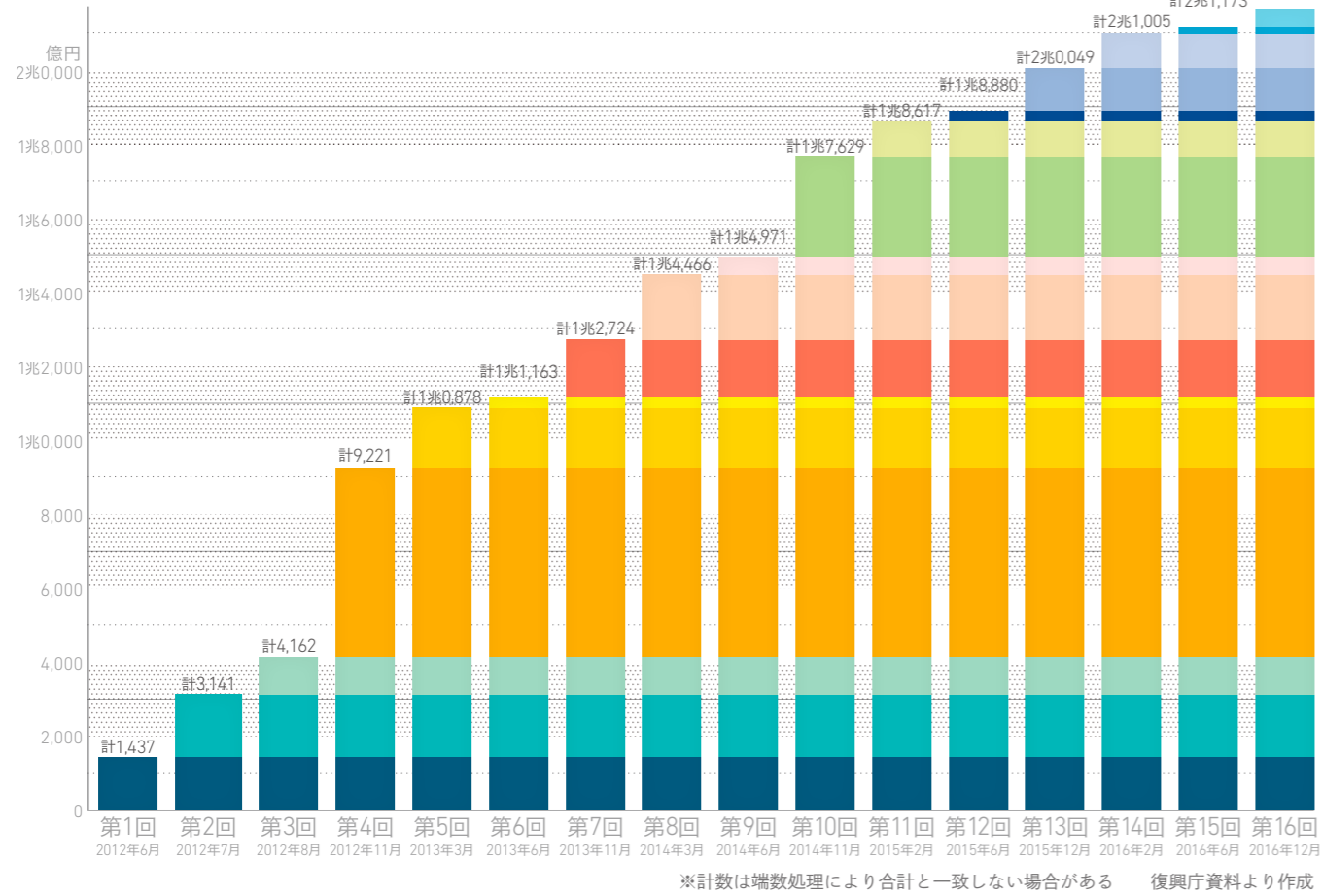
### 宮城県の前算額の推移 (一般会計)



### 宮城県内自治体への復興交付金の交付可能額 (事業費)



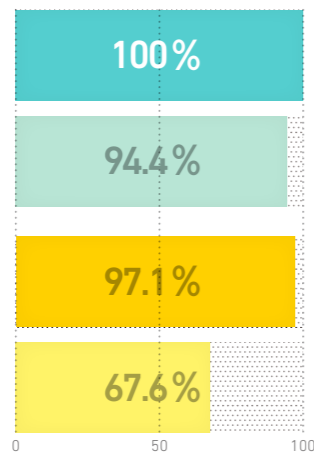
### 宮城県への復興交付金の交付可能額 (事業費)



## 復興まちづくり事業の進捗状況 (2016年12月31日現在)

### 防災集団移転促進事業

計画地区数：195地区  
事業計画の大臣同意は全地区で得ている。

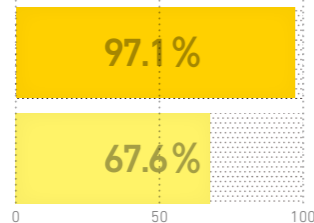


■ **工事着手 100%**  
造成工事着手等地区：195地区

■ **建築可能 約94%**  
住宅等建築工事可能地区：184地区

### 土地区画整理事業

計画地区数：34地区  
都市計画決定は全地区でなされている。



■ **工事着工 約97%**  
工事着工：33地区

■ **建築可能 約68%**  
住宅等建築工事可能地区：23地区

## 市町別の防災集団移転促進事業、土地区画整理事業の状況

市町名	防災集団移転促進事業			土地区画整理事業		
	計画地区数	造成工事着手等(率)	住宅等建築工事着手(率)	計画地区数	事業認可(率)	工事着工(率)
仙台市	14	14 (100.0%)	14 (100.0%)	1	1 (100.0%)	1 (100.0%)
石巻市	56	56 (100.0%)	51 (91.1%)	15	15 (100.0%)	9 (60.0%)
塩竈市	2	2 (100.0%)	2 (100.0%)	2	2 (100.0%)	2 (100.0%)
気仙沼市	51	51 (100.0%)	50 (98.0%)	3	3 (100.0%)	3 (100.0%)
名取市	2	2 (100.0%)	2 (100.0%)	2	1 (50.0%)	1 (50.0%)
多賀城市	—	—	—	1	1 (100.0%)	1 (100.0%)
岩沼市	2	2 (100.0%)	2 (100.0%)	1	1 (100.0%)	1 (100.0%)
東松島市	7	7 (100.0%)	7 (100.0%)	3	3 (100.0%)	3 (100.0%)
亶理町	5	5 (100.0%)	5 (100.0%)	—	—	—
山元町	3	3 (100.0%)	3 (100.0%)	—	—	—
七ヶ浜町	5	5 (100.0%)	5 (100.0%)	4	4 (100.0%)	0 (0.0%)
利府町	—	—	—	—	—	—
女川町	22	22 (100.0%)	17 (77.3%)	1	1※ (100.0%)	1※ (100.0%)
南三陸町	26	26 (100.0%)	26 (100.0%)	1	1 (100.0%)	1 (100.0%)
合計	195	195 (100.0%)	184 (94.4%)	34	33 (97.1%)	23 (67.6%)

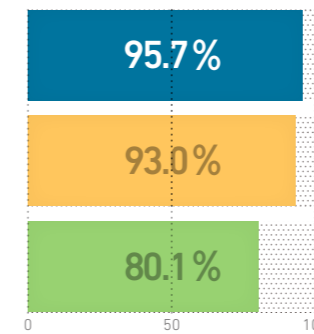
- **造成工事着手**  
工事請負契約の締結等が完了したもの。
- **住宅等建築工事可能**  
土地を購入又は借地し、住宅を建てられる準備が整った状態のもの。
- **事業認可**  
事業計画が知事の認可を受けたもの。
- **工事着工**  
事業認可後、地元調整や工事契約手続が完了し、施工業者が区画整理事業用地内の工事に着手したもの（伐採や搬入路等の準備工も含む）。

※女川町は事業認可を4カ所取得しているが、1地区として計上

## 災害公営住宅の整備状況 (2016年12月31日現在)

### 災害公営住宅

計画戸数：15,993戸



■ **事業着手 約96%**  
設計業務等に着手したものの着手戸数：15,311戸

■ **着工 約93%**  
建設工事に着手したものの着工戸数：14,873戸

■ **完成 約80%**  
完成戸数：12,804戸

## 市町別の災害公営住宅の整備状況

市町名	計画戸数	事業着手戸数		工事着手戸数		完成戸数	
		進捗率	進捗率	進捗率	進捗率		
仙台市	3,179戸	3,179戸	100.0%	3,179戸	100.0%	3,179戸	100.0%
石巻市	4,500戸	4,163戸	92.5%	3,881戸	86.2%	3,468戸	77.1%
塩竈市	390戸	390戸	100.0%	390戸	100.0%	289戸	74.1%
気仙沼市	2,129戸	2,129戸	100.0%	2,129戸	100.0%	1,644戸	77.2%
名取市	716戸	625戸	87.3%	496戸	69.3%	169戸	23.6%
多賀城市	532戸	532戸	100.0%	532戸	100.0%	532戸	100.0%
岩沼市	210戸	210戸	100.0%	210戸	100.0%	210戸	100.0%
東松島市	1,122戸	1,001戸	89.2%	1,001戸	89.2%	831戸	74.1%
亶理町	477戸	477戸	100.0%	477戸	100.0%	477戸	100.0%
山元町	490戸	490戸	100.0%	490戸	100.0%	415戸	84.7%
松島町	52戸	52戸	100.0%	52戸	100.0%	52戸	100.0%
七ヶ浜町	212戸	212戸	100.0%	212戸	100.0%	212戸	100.0%
利府町	25戸	25戸	100.0%	25戸	100.0%	25戸	100.0%
女川町	861戸	728戸	84.6%	701戸	81.4%	318戸	36.9%
南三陸町	738戸	738戸	100.0%	738戸	100.0%	623戸	84.4%
登米市	84戸	84戸	100.0%	84戸	100.0%	84戸	100.0%
涌谷町	48戸	48戸	100.0%	48戸	100.0%	48戸	100.0%
栗原市	15戸	15戸	100.0%	15戸	100.0%	15戸	100.0%
大崎市	170戸	170戸	100.0%	170戸	100.0%	170戸	100.0%
大郷町	3戸	3戸	100.0%	3戸	100.0%	3戸	100.0%
美里町	40戸	40戸	100.0%	40戸	100.0%	40戸	100.0%
合計	15,993戸	15,311戸	95.7%	14,873戸	93.0%	12,804戸	80.1%

※2017年度までに整備予定

復興を担う次世代のために  
3.11 東日本大震災  
宮城県建設業協会の闘い 5

平成29(2017)年2月

発行 一般社団法人 宮城県建設業協会  
〒980-0824  
仙台市青葉区支倉町2番48号  
宮城県建設産業会館6階  
電話 022-262-2211 FAX 022-263-7059  
E-mail [jigyo@miyakenkyo.or.jp](mailto:jigyo@miyakenkyo.or.jp)  
URL <http://www.miyakenkyo.or.jp>

編集・制作 日刊建設工業新聞社

写真協力 水本 圭亮

印刷 平河工業社





一般社団法人 宮城県建設業協会